

青森県埋蔵文化財調査報告書 第329集

# 十三湊遺跡VII

第136次～144次、第146次～150次発掘調査概報

平成13年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第329集

# 十三湊遺跡VII

第136次～144次、第146次～150次発掘調査概報

平成13年度

青森県教育委員会



口絵 1 第137次調査 畝状遺構完掘状況（東から）

# 序

十三湊遺跡は北日本を代表する全国でも有数の中世港湾都市遺跡として推定されていましたが、これまでは文献資料も少なく、十三湊遺跡を拠点に活躍したとされる安藤氏とともに謎に包まれてきました。

しかし、1991年から1993年の3カ年にわたる国立歴史民俗博物館の調査によって、十三湊遺跡が大規模な都市計画をもった中世の港町であることがわかってきました。

このように、十三湊遺跡は日本の中世史を解明する上で重要な遺跡であることから、青森県では遺跡の早期の実体解明を目指し、平成7年度から地元の市浦村と協力して発掘調査を行い、遺跡の全体構造の把握に努めており、今年で7年目を迎えました。

本年度は、推定町屋の範囲確認と、推定宗教施設の範囲確認調査を行いました。推定町屋地区では、土坑や溝跡が確認されました。推定宗教施設地区では、掘立柱建物跡、畑跡が確認されました。

十三湊遺跡の発掘調査成果が今後各方面の研究に活用され、また、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護意識の高揚につながることを期待します。

最後になりましたが、平素より埋蔵文化財の保護に対しご理解・ご協力を賜っている市浦村教育委員会、また、発掘調査の実施と報告書の作成に当たりご指導・ご協力を賜りました関係各位に対しまして、篤くお礼申し上げます。

平成14年3月

青森県教育委員会

教育長 佐藤 正昭

# 例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成13年度に国庫補助事業として発掘調査を実施した市浦村大字十三所在の十三湊遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財班が編集・作成した。
- 3 本遺跡の遺跡登録番号は、38022番である。
- 4 本報告書の執筆者名は文末に記してある。
- 5 表紙絵図については、函館市立図書館所蔵『十三絵図』を複写し使用した。
- 6 挿図の縮尺は各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 7 土層の色調については、『新版・標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1996）を用いた。
- 8 出土遺物、実測図、写真等は、青森県教育庁文化財保護課が保管している。
- 9 遺構の表示記号は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の用例にほぼ従い、以下の記号を用いた。  
SD：溝、SK：土坑、SB：掘立柱建物跡、SA：柵、SP：柱穴、SI：竪穴遺構、  
SE：井戸、SF：道路、SX：不明遺構
- 10 出土遺物については、年代判別が可能なものについては、珠洲は吉岡編年（吉岡1994）、古瀬戸は藤澤編年（1996）、輸入陶磁器については国立歴史民俗博物館修正の分類（国立歴史民俗博物館1993）、肥前陶磁器は大橋編年（大橋1993）に従っている。
- 11 本報告書で使用している時期区分は、青森県教育委員会1996『十三湊遺跡』に従っている。なお、この時期区分については、中世 期・中世 期は十三湊遺跡 期（国立歴史民俗博物館1995・市浦村教育委員会1996）に対応し、以下それぞれ中世 期は十三湊遺跡 a・b期、中世 期は十三湊遺跡 c期に対応する。
- 12 発掘調査及び報告書の作成にあたり、次の諸氏並びに各機関からご教示、ご指導をいただいた。深く感謝の意を表す次第である。（順不同、敬称略）  
文化庁、国立歴史民俗博物館、市浦村、市浦村教育委員会、富山大学考古学研究室、湊迎寺、願龍寺、函館市立図書館、坂井秀弥、藤沼邦彦、斉藤利男、関根達人、白川隆治、榊原滋高

# 目 次

口 絵	
序	
例 言	
目 次	
第 章 はじめに .....	1
第 1 節 調査計画とこれまでの調査経過 .....	1
第 2 節 調査要項 .....	2
第 章 調査の方法と経過 .....	3
第 1 節 調査の方法 .....	3
第 2 節 調査の経過 .....	3
第 章 調査の概要 .....	5
第 1 節 第136次調査区 .....	5
第 2 節 宗教施設想定地区の調査 .....	12
1 第137次調査区 .....	12
2 第138次調査区 .....	18
3 第139次調査区 .....	21
4 第140次調査区 .....	25
5 第141次調査区 .....	25
6 第142次調査区 .....	26
7 第143次調査区 .....	26
8 第144次調査区 .....	27
9 第146次調査区 .....	28
10 第147次調査区 .....	28
11 第148次調査区 .....	29
12 第149次調査区 .....	29
13 第150次調査区 .....	30
第 章 ま と め .....	35
引用・参考文献 .....	36
写真図版 .....	37
報告書抄録 .....	45

# 第 章 はじめに

## 第 1 節 調査計画とこれまでの調査経過

十三湊遺跡は、1991年から1993年にかけて行われた国立歴史民俗博物館の調査を契機として、中世都市の地割りを今に残す日本中世史上極めて重要な遺跡であることが明らかになった。このため、地元市浦村教育委員会では、平成5年度に「遺跡整備検討委員会」を発足し、平成6年度より調査・研究を進めている。

青森県教育委員会では、平成6年度に大規模・重要遺跡調査研究を行い、国立歴史民俗博物館が作成した十三湊遺跡想定復元図に基づいて、6ヶ年の発掘調査計画を作成した。年度ごとの調査成果をふまえて、一部計画変更を行いながら、平成7年度から継続して調査を進めている。また、市浦村教育委員会が推定安藤氏館跡の調査を行い、青森県教育委員会が推定家臣団屋敷、町屋、港湾施設、宗教施設などの調査を行うという方向性がとられ、県と村が役割分担しながら協力して調査を進めている。

青森県教育委員会では、十三湊遺跡の国史跡指定に向け、当初6ヶ年計画で事業を計画し、推進したものであるが、当初考えていた以上に構造が複雑であるなどの理由によって、調査計画の見直しが必要になった。このことについて、発掘調査打合せ会議や報告書作成会議などで検討した結果、当初6ヶ年計画を3ヶ年延長し、国史跡指定に向け、さらなる情報が必要な地域の発掘調査および関連作業を行うこととしたものである。このことから、今年度の調査は、十三湊遺跡の都市域の外側輪郭を確定させる情報を得ることと、宗教施設の在り方を探るための調査を行うこととした。

町屋想定地区では、これまでいくつかの発掘調査が実施されている。特に第6次、17次、71次調査区では、中軸街路（当時のメインストリート）に面して、柵や溝で区画された町屋屋敷が整然と並んでいる様子が確認されている。出土遺物の年代から、遺跡に土塁と堀が造られる時期に、このような町並みが広がったことも明らかとなってきている。

平成12年度は町屋の東側の範囲確認をするために第122次調査区を設定し調査を行った結果、十三湖岸付近まで町屋が展開することが確認された。そこで、今年度は町屋の南側の範囲確認をすることを目的とし、第136次調査区を設定して発掘調査を実施することとなった。

宗教施設想定地区では、本年度が初めての調査年度である。国立歴史民俗博物館は、地籍図及び『十三絵図』などの資料と、3年間の発掘調査成果から、現在の湊迎寺・願龍寺付近での宗教施設の存在を想定している。

しかし、宗教施設そのものは確認されておらず、確認調査が必要となっていた。そこで、今年度は宗教施設の存否確認を目的として第137次・第138次・第139次調査をはじめとして数カ所にて調査区を設定し、発掘調査を実施することとなった。

（工藤 忍）

## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

日本中世史解明の上で極めて重要、かつ大規模な十三湊遺跡の早期国史跡指定を目指し、発掘調査を実施し、遺跡の範囲・性格等を明らかにする。

2 調査期間 平成13年6月4日～同年7月31日・平成13年11月27日～12月5日

3 遺跡名及び所在地 十三湊遺跡（県遺跡番号38022）  
青森県北津軽郡市浦村大字十三

4 調査対象面積 736m<sup>2</sup>

5 調査実施者 青森県教育委員会

6 調査担当機関 青森県教育庁文化財保護課

7 調査協力機関 市浦村教育委員会

### 8 調査参加者

調査指導員	村越 潔	青森大学教授
調査協力員	木村 義光	市浦村教育委員会教育長
調査員	佐藤 仁	浪岡町史編集委員長（歴史学）
	高島 成侑	八戸工業大学教授（建築学）
	鈴木 三男	東北大学大学院理学研究科教授（植物学）
	山口 義伸	青森県環境生活部文化・スポーツ振興課 青森県史編纂室総括主幹（地質学）
	前川 要	富山大学人文学部教授
	小野 正敏	国立歴史民俗博物館助教授（考古学）
	小島 道裕	国立歴史民俗博物館助教授（歴史学）
	酒井 秀男	富山大学理学部助教授（地球科学）

調査担当者 青森県教育庁文化財保護課

埋蔵文化財班長	工藤 大
文化財保護総括主査	渡部 泰雄
文化財保護主査	能代谷征則
文化財保護主事	神 康夫
文化財保護主事	鈴木 和子
文化財保護主事	工藤 忍
調査補助員	齋藤 克芳
調査補助員	弦巻 由美
調査補助員	和田 健弥



# 第 章 調査の方法と経過

## 第 1 節 調査の方法

十三湊遺跡では、国土座標軸 X = 110.5、Y = -43.0を原点とし、遺跡全体に50mごとの方眼を組み、北東コーナーの座標が地区名となるよう大区画のグリッドを設定しているため、調査時はこの50m方眼を10等分した 5 mごとに杭を打設しグリッド設定した。調査区域が狭隘な地点は、調査区両端に基本杭を設定し、その杭頭を後日座標測定を行い、室内整理段階にてグリッド設定した。旧十三小学校校庭に存在する座標杭の数値は次のとおりである。

本杭 X = 114231.150 Y = -42128.569 H = 2.299

控杭 X = 114231.150 Y = -42035.236 H = 2.428

粗掘り作業は人力で行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査は、調査区壁面で確認した基本層序に従って分層発掘を行っている。遺物の取り上げは、包含層出土遺物は簡易平板測量により、遺構内出土遺物は個別図面中に地点とレベルを落とし、取り上げた。遺構は基本的に1/20縮尺で実測し、詳細箇所は1/10縮尺で実測した。

遺構の名称は種類ごとに付し、確認順あるいは調査着手順に番号を付した。土層の名称は、基本層序については、表土から下位にローマ数字を付し、細分される土層はさらに小文字のアルファベットを付加した。遺構内の堆積土については上位から下位に算用数字を付した。

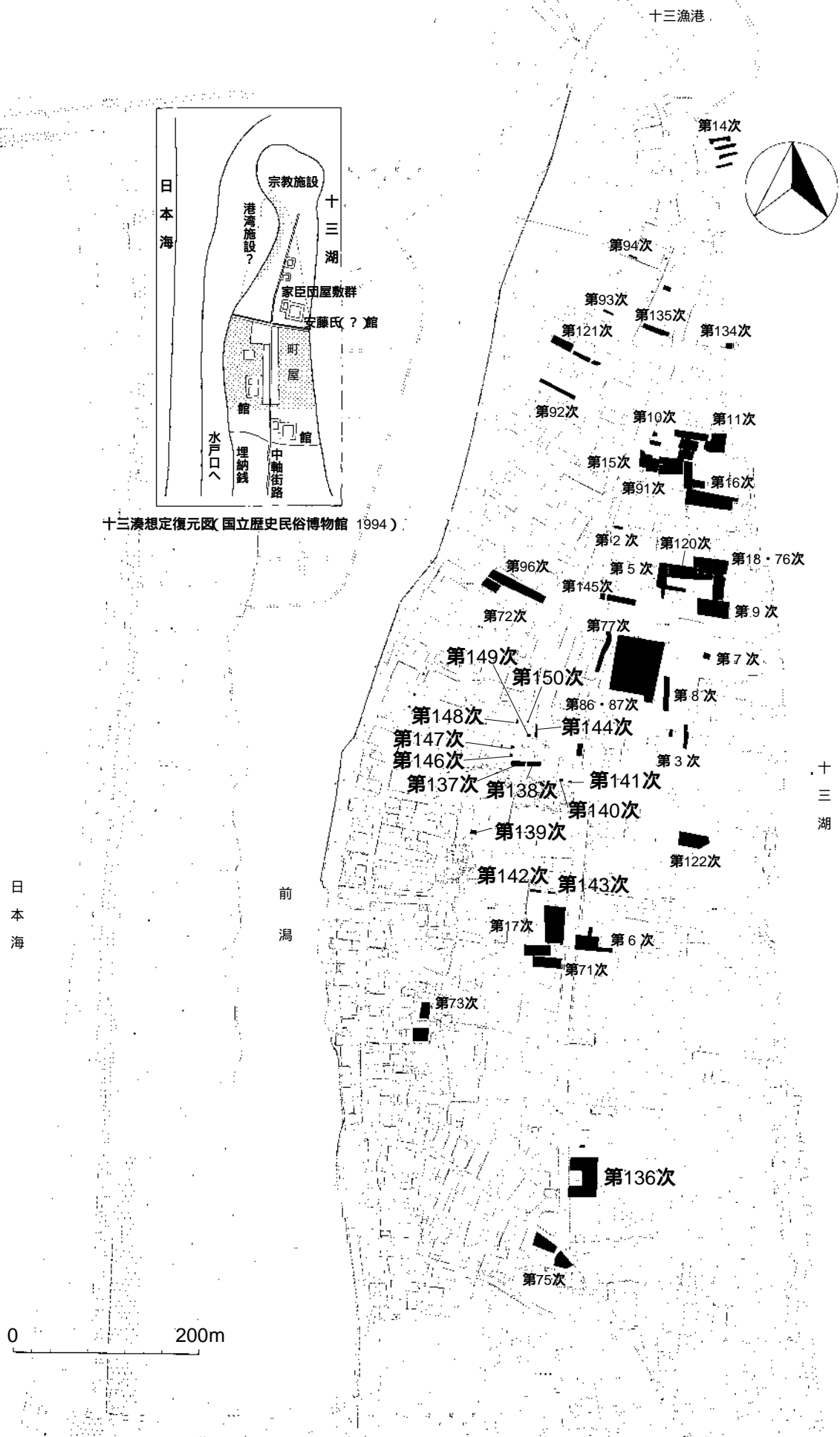
第136調査区・第137次調査区・第138次調査区・第139次調査区は、調査区ごとの表記基本土層名は対応しない。

第140次・第141次・第142次・第143次・第144次・第146次・第147次・第148次・第149次・第150次調査区は、表記基本土層名は対応している。中世の遺構確認を目的としたため、近世に相当する土層にて確認した遺構は一部を除き完掘したが、中世相当土層にて確認した遺構は完掘していない。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、モノクロームの2種類のフィルムを用いた。また、遺跡の全景写真はフォトバルーンにより行った。(工藤 忍)

## 第 2 節 調査の経過

想定宗教施設地区では、まず第137次調査区の調査に着手し6月4日から粗掘りを開始した。隣接する第138次調査区予定地にて、かつて土壌入れ替えを行ったという地主の証言があったため、試掘トレンチを設定し遺構の存否確認を行った。その結果耕作による攪乱を免れていることが判明したため、調査範囲を拡張した。その結果、第137・138次調査区から中世の畑跡及び掘立柱建物跡を確認した。さらに湊迎寺に近接する地点に第139～第141次調査区、願龍寺周辺において第142・143次調査区を設定し、遺構の確認を行った。7月22日には現地見学会を開催し、熱心な質問を受けた。7月24日には、保存のための山砂を入れ埋め戻しを行った。11月27日には、湊迎寺周辺の情報をより集積するため、主に湊迎寺北側にて試掘調査を開始し、遺構確認につとめた。12月3日から埋め戻しを行い、12月5日にはすべての作業を終了した。(工藤 忍)



十三湊想定復元図(国立歴史民俗博物館 1994)

第1図 調査区位置図

# 第 章 調査の概要

## 第 1 節 第136次調査区

### 1 基本層序（第 2 図）

基本層序は調査区の各壁面で行った。上から第 層暗褐色砂質土（表土）、第 層黒褐色砂質土（耕作土）、第 層暗褐色砂質土（中近世遺物包含層）、第 層黒褐色砂質土（中世面）、第 層黒褐色砂質土（中世面）、第 層褐色砂質土（地山）を確認している。基本セクションで確認したところ、調査区内の中世遺構は第 層から掘り込まれている。

調査区は近年まで畑として利用されており、全面的に耕作による削平を受けている。このため、第 層～第 層が欠如している所が多く、遺構の検出は主に第 層で行っている。

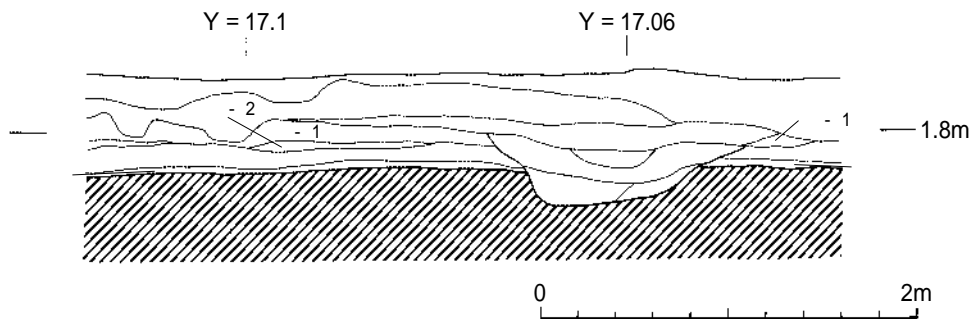
### 2 検出遺構（第17図）

本調査区で検出した中世遺構は、溝13条、土坑35基、柱穴76基である。

#### (a) 区画遺構

調査区で検出した溝は、2つのタイプに分けられる。1つはS D02～S D04、S D07～S D10のような東西方向や南北方向に延びる溝である。これらの溝は軸線が一定せず、やや蛇行して延びている。S D02は最大幅2.25m、深さ約65cmの規模の大きな溝であるが、大きく蛇行して延びており、屋敷の区画とは考えにくい。これまで土塁南側で行われた発掘調査（17次調査）でも、町屋整備以前の遺構として、やはり大きく蛇行して延びる溝が確認されている。このことから、S D02も、町屋地区の整備が行われる以前に造られた溝である可能性が高いと考えられる。S D02は溝の埋土上層より京都系のかわけと古瀬戸後 期古段階の折縁深皿が出土しており、15世紀中頃には埋まっていたと考えられる。

もう一つはS D05に見られる、方形、あるいはコの字に巡ることが想定されるタイプの溝である。このような溝も、同じく17次調査区やその周辺の調査区で確認されている。17次調査区周辺では土坑墓が確認されており、墓に関連する溝と考えた。今回の調査でも周辺に土坑墓が広がっており、墓に伴う溝と考えることができる。



第 2 図 基本土層図

(b) 土 坑

本調査区では多くの土坑が検出されている。特に調査区北西側の地区では多くの土坑を検出した。規模は直径1m弱のものから2m近いもの、平面形は円形に近いものから楕円形のものなど様々である。これらの土坑中からは、鉄製品の釘や刀子、土器・陶磁器などの遺物とともに、骨片や炭化物が多く出土しており、土坑墓としての性格を考えることができる。出土遺物の陶磁器は、破片のものが多く、完形品になるものはほとんどない。このことから、これらの遺物は、副葬品ではなく土坑墓を埋める際に混入した遺物であると考えられる。

(c) 柱 穴

76基の柱穴が確認されているが、調査区内で建物跡の復元はできなかった。

3 出土遺物(第3図~第6図)

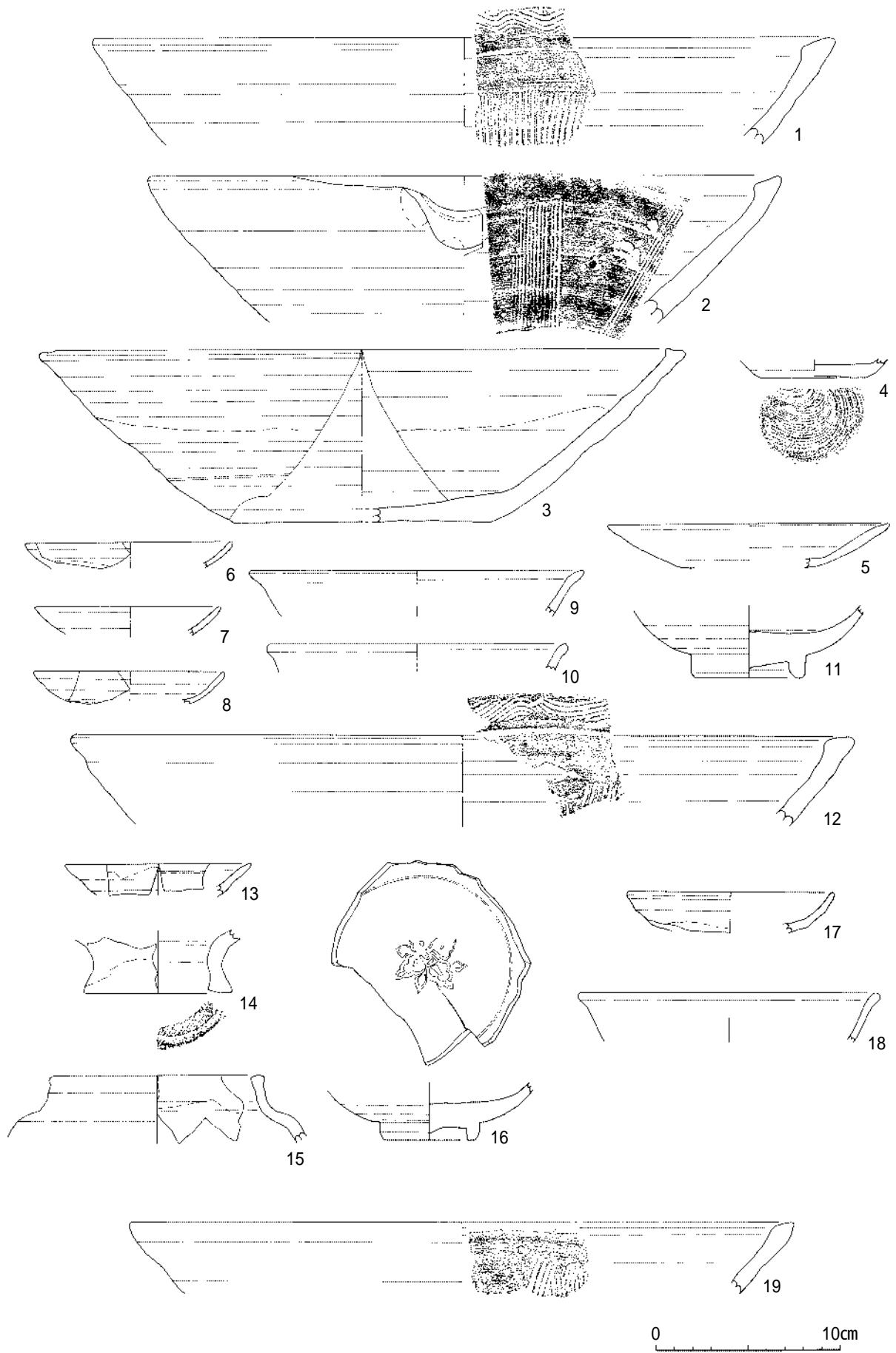
本調査区で出土した遺物の総数は492点である。このうち、中世の土器・陶磁器は294点である。出土した中世の土器・陶磁器は、土師器・瓦質土器・瓷器系陶器・珠洲・古瀬戸の国産土器・陶器と、青磁・白磁の貿易陶磁器に分けられる。比率的には、破片数で見ても、口縁部個体数(宇野1981、1992)で見ても、貿易陶磁器が国産土器・陶器をわずかに上回る。国産土器・陶器では、古瀬戸が最も多く、珠洲がそれに次ぐ。貿易陶磁器では、青磁が白磁を大きく上回る。

年代的には、古瀬戸の後期、珠洲の 期、青磁のD - 類がそれぞれの主体を占めていることから、15世紀前半代が中心時期であると考えられる。

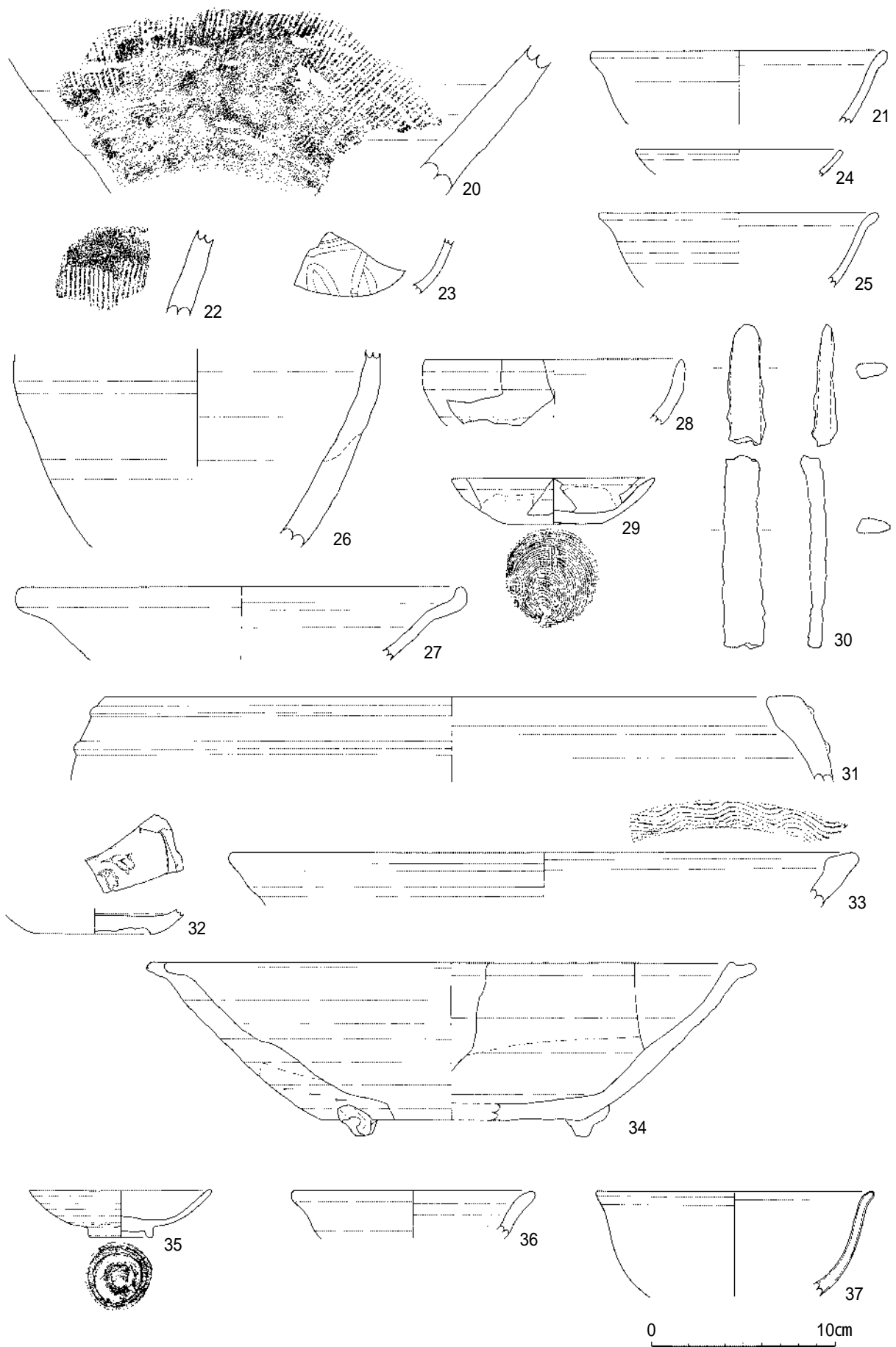
(鈴木 和子)

第1表 136次調査区 中世土器・陶磁器組成

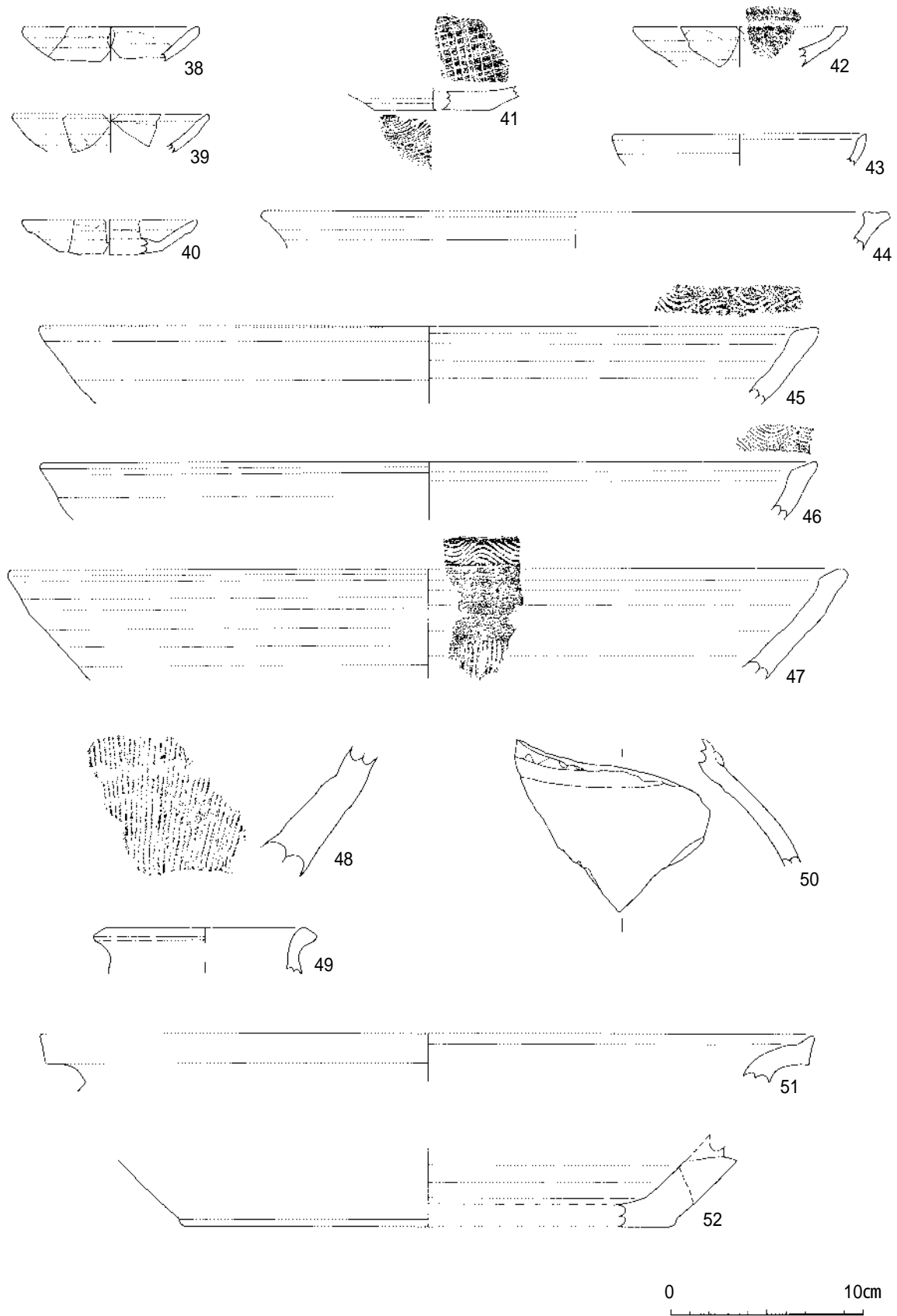
種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	5 [ 1.7%]	0.44[ 4.8%]
瓦質土器	火鉢	7 [ 2.4%]	0.1[ 1.1%]
瓷器系陶器	壺甕	8 [ 2.7%]	0.04[ 0.5%]
珠洲	壺甕	10	0.12
	すり鉢	43	1.23
	不明	2	0
		55 [ 18.7%]	1.35 [ 14.8%]
古瀬戸	碗皿	27	0.83
	盤類	15	0.43
	卸皿	2	0.09
	壺瓶	3	0.11
	天目茶碗	9	0.38
	不明	4	0.05
		60 [ 20.4%]	1.89 [ 20.8%]
国産陶磁器		135 [ 45.9%]	3.82 [ 42.0%]
青磁	碗皿	96	2.23
	坏	1	0
	盤類	7	0.17
		104 [ 35.4%]	2.4 [ 26.4%]
白磁	碗皿	48	2.58
	坏	7	0.3
		55 [ 18.7%]	2.88 [ 31.6%]
貿易陶磁		159 [ 54.1%]	5.28 [ 58.0%]
中世陶磁器合計		294 [ 100.0%]	9.1 [ 100.0%]



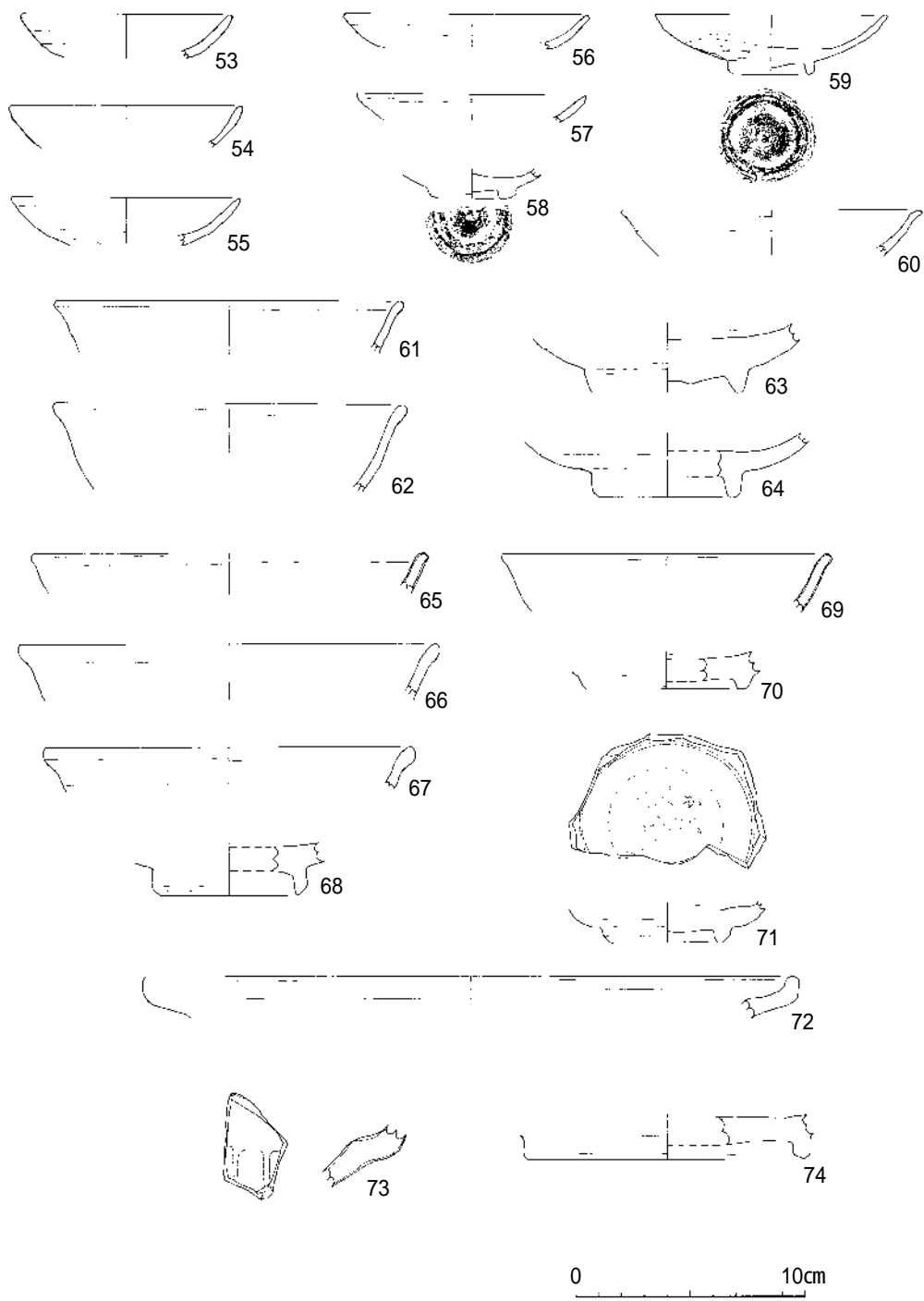
第3図 第136次調査区遺構内出土遺物(1)



第4図 第136次調査区遺構内出土遺物(2)



第 5 图 第136次調査区遺構外出土遺物



第 6 图 第136次調査区遺構外出土遺物



番号	種類	器種	遺構	層位	X	Y	レベル(m)	備考	整理
1	珠洲	すり鉢	SD02		64.00	17.42	1.508	期、口径40cm	AT2001-2-477
2	珠洲	すり鉢	SD02		64.22	17.36	1.455	期、口径34cm	AT2001-2-446
3	古瀬戸	折縁深皿	SD02		63.92	17.46	1.780	後期(古) 口径35.2cm	AT2001-2-457
4	古瀬戸	縁釉小皿	SD02		63.82	17.44	1.673	底径5.6cm	AT2001-2-197
5	土師器	皿	SD02		63.94	17.46	1.739	京都系、口径15cm	AT2001-2-467
6	白磁	皿	SD02		63.62	17.48	1.636	D群、口径11cm	AT2001-2-187
7	白磁	皿	SD02		63.80	17.46	1.618	D群、口径10cm	AT2001-2-195
8	白磁	皿	SD02		63.94	17.46	1.740	D群、口径10cm	AT2001-2-471
9	青磁	碗	SD02		63.60	17.48	1.480	D-群、口径18cm	AT2001-2-184
10	青磁	碗	SD02		64.16	17.36	1.472	D-群、口径16cm	AT2001-2-449
11	青磁	碗	SD02		63.62	17.48	1.348	D-群、底径5.8cm	AT2001-2-495
12	珠洲	すり鉢	SK01		63.70	17.34	1.368	期、口径42cm	AT2001-2-221
13	古瀬戸	縁釉小皿	SK01		63.70	17.34	レベル不明	口径10cm	AT2001-2-284
14	古瀬戸	尊式花瓶	SK01		63.70	17.34	1.410	底径8cm	AT2001-2-232
15	古瀬戸	三耳壺	SK01		63.70	17.36	1.537	口径11cm、鉄釉	AT2001-2-231
16	青磁	碗	SK01		63.70	17.34	1.352	D-類、底径5cm	AT2001-2-222
17	白磁	皿	SK01		63.70	17.36	1.609	D群、口径11cm	AT2001-2-226
18	青磁	碗	SK01		63.70	17.34	1.573	D-類、口径16cm	AT2001-2-219
19	珠洲	すり鉢	SK15		64.26	17.02	1.428	期、口径36cm	AT2001-2-285
20	珠洲	すり鉢	SK17		64.28	17.10	1.387	期	AT2001-2-303
21	青磁	碗	SK17		64.28	17.10	1.508	D-類、口径16cm	AT2001-2-300
22	珠洲	すり鉢	SK21		64.24	17.12	1.626	期～期	AT2001-2-341
23	青磁	碗	SK21		64.24	17.12	1.378		AT2001-2-346
24	白磁	皿	SK23		64.20	17.14	1.320	D群、口径11cm	AT2001-2-283
25	青磁	碗	SK23		64.20	17.14	1.514	D-類、口径15cm	AT2001-2-282
26	珠洲	壺	SK22		64.22	17.14	1.430	期～期、R種	AT2001-2-289
27	青磁	盤	SK22		64.22	17.14	1.460	口径24cm	AT2001-2-287
28	古瀬戸	天目茶碗	SK25		64.20	17.08	1.495	口径14cm	AT2001-2-335
29	古瀬戸	縁釉小皿	SK25		64.18	17.08	1.649	口径11cm	AT2001-2-328
30	鉄製品	刀子	SK25		64.20	17.08	1.126		AT2001-2-331
31	瓦質土器	火鉢	SK32		64.14	17.20	1.407	口径38cm	AT2001-2-316
32	青磁	皿	SK32		64.12	17.20	1.546	底径6cm	AT2001-2-319
33	珠洲	すり鉢	SK35		64.16	17.50	1.468	期、口径34cm	AT2001-2-427
34	古瀬戸	折縁深皿	SK35		64.16	17.50	1.444	後期、口径33.2cm	AT2001-2-428
35	白磁	皿	SK35		64.16	17.52	1.576	D群、口径10cm	AT2001-2-422
36	青磁	皿	SK35		64.28	17.50	1.618	D-類、口径13cm	AT2001-2-434
37	青磁	碗	SK35		64.16	17.50	1.453	D-類、口径16cm	AT2001-2-431
38	古瀬戸	縁釉小皿		層	64.20	17.24	1.739	口径10cm、底径6cm、器高1.8cm	AT2001-2-371
39	古瀬戸	縁釉小皿		層				口径9cm	AT2001-2-138
40	古瀬戸	縁釉小皿		層					AT2001-2-375
41	古瀬戸	卸皿		層	63.78	17.38	1.774	底径6cm	AT2001-2-52
42	古瀬戸	卸皿		層	63.68	17.30	1.586	口径11cm	AT2001-2-392
43	古瀬戸	天目茶碗		層				口径13cm	AT2001-2-273
44	古瀬戸	折縁深皿		層	63.68	17.18	1.537	口径30cm	AT2001-2-402
45	珠洲	すり鉢		層	63.76	17.36	1.811	期、口径40cm	AT2001-2-9
46	珠洲	すり鉢		層	63.72	17.44	1.492	期、口径40cm	AT2001-2-481
47	珠洲	すり鉢		層	63.72	17.12	1.595	期、口径40cm	AT2001-2-411
48	珠洲	すり鉢		層				期	AT2001-2-84
49	珠洲	壺		層				期～期	AT2001-2-111
50	瓦質土器	火鉢		層	63.74	17.40	1.565		AT2001-2-154
51	瓷器系陶器	甕		層	63.78	17.36	1.807		AT2001-2-10
52	瓷器系陶器	壺甕類		層					AT2001-2-134
53	白磁	皿		層	63.76	17.42	1.757	D群、口径9cm	AT2001-2-54
54	白磁	皿		層	63.64	17.38	1.710	D群、口径10cm	AT2001-2-132
55	白磁	皿		層	63.80	17.46	1.766	D群、口径10cm	AT2001-2-42
56	白磁	皿		層	63.68	17.20	1.598	D群、口径11cm	AT2001-2-454
57	白磁	皿		層	63.66	17.46	1.719	D群、口径10cm	AT2001-2-123
58	白磁	皿		層	64.20	17.52	1.683	D群	AT2001-2-388
59	白磁	碗		層				口径13cm	AT2001-2-106
60	白磁	皿		層	63.68	17.48	1.760	D群、口径10cm	AT2001-2-26
61	青磁	碗		層	63.74	17.04	1.575	D-類、口径15cm	AT2001-2-416
62	青磁	碗		層	63.90	17.42	2.045	D-類、口径15cm	AT2001-2-390
63	青磁	碗		層	63.94	17.40	1.810	D-類、口径17cm	AT2001-2-458
64	青磁	碗		層	63.60	17.40	1.880	D-類、口径18cm	AT2001-2-22
65	青磁	碗		層	63.82	17.44	1.765	D-類、口径16cm	AT2001-2-41
66	青磁	碗		層	63.70	17.44	1.790	D-類、底径6cm	AT2001-2-59
67	青磁	碗		層	64.18	17.12	1.708	D-類、底径6cm	AT2001-2-259
68	青磁	碗		層	63.62	17.50	1.810	D-類、底径5cm	AT2001-2-25
69	青磁	皿		層	64.28	17.08	1.691	D-類、口径14cm	AT2001-2-271
70	青磁	碗皿		層	63.66	17.36	1.718	D-類、底径6.5cm	AT2001-2-65
71	青磁	皿		層				D-類、底径5cm	AT2001-2-499
72	青磁	盤		層	63.80	17.50		口径28cm	AT2001-2-3
73	青磁	盤		層					AT2001-2-501
74	青磁	盤		層	63.80	17.50			AT2001-2-37

第2表 136次調査区遺物観察表

## 第 2 節 宗教施設想定地区の調査

### 1 第137次調査区

湊迎寺の北方に位置し、畑地として利用されていた箇所である。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約16m×南北約7mの合計約112m<sup>2</sup>である。遺構の検出は第 層、第 層上面、第 層上面、第 層上面で行った。遺構はすべて完掘した。遺構平面図は、第 層上面、第 層上面、第 層上面で検出した中世遺構と想定されるもののみ抽出し、掲載した。

#### (1) 基本層序 (第 7 図)

第137次調査区では、基本土層は土質によって第 層から第 層に区分している。上から順に第 層：黒褐色・暗褐色砂質土主体層（表土・耕作土）、第 層：暗褐色砂質土主体層（近世相当）、第 層：黒褐色砂質土主体層（中世相当）、第 層：黒色土主体層（中世相当）、第 層：灰黄褐色砂（地山無遺物層）である。これら ~ 層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

#### (2) 検出遺構 (第 7 図)

##### (a) 掘立柱建物跡

調査区全域でピットが確認されているが、全体に小規模なものが多い。本調査区では、図示していないが2棟の掘立柱建物跡が復元できるようである。調査面積が少ないため、建物の面的な広がりを把握するまでは至らなかった。

##### (b) 区画遺構

5条検出した。本調査区で確認された区画遺構は、すべて規模が小さく、浅いものが多い。S D02は北方向に屈曲し、調査区外に延びる。第 層を掘り込み構築している。

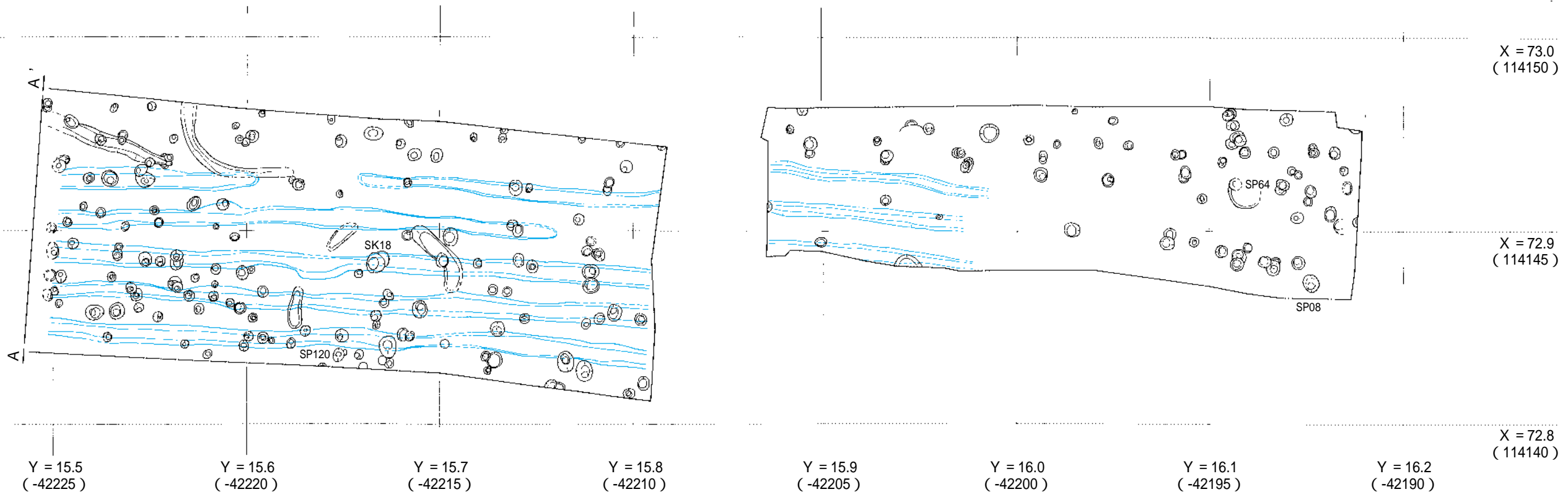
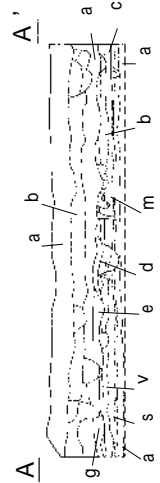
##### (c) 畝状遺構

本調査区全面で確認された。平面では溝部分（凹部）は5条確認されたが、調査区西壁断面では6条確認している。溝と溝の間隔で深さは約5～10cmである。畝の軸は約E 2° Nである。調査区壁面の断面観察では、土を盛り上げた部分（凸部）は2層に分層することができた。本遺構の直上には、しまりがなく乾きやすい第 a層が全面にわたり自然堆積しており、上層からの掘り込みは見られず、第 層の上面が変化していることから、第 層堆積後に作られた畝と思われる。

(工藤 忍)

137次

a層	10YR3/2	黒褐色砂質土	細-中
b層	10YR3/2	黒褐色砂質土	細-中
a層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土	細-中
d層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土	細-中
e層	10YR4/4	褐色砂質土	細-粗
g層	10YR4/4	褐色砂質土	細-中
b層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細
c層	10YR2/1	黒砂質土	細
m層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細-中
s層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細
v層	10YR2/2	暗褐色砂質土	細-中
a層	10YR2/1	黒砂質土	細
a層	10YR3/4	暗褐色砂質土	細-粗



第7図

### (3) 出土遺物 (第8図・第9図)

#### 遺構内出土遺物

1は白磁D群八角小坏である。2は珠洲甕体部破片である。～期のもので、焼成は還元硬質である。胎土は粗い。1・2ともSK18覆土からの出土である。3は珠洲すり鉢体部破片である。焼成は酸化軟質であるが、胎土は密である。畝条遺構覆土 a層からの出土である。4は龍泉窯系青磁碗でB-類であり、全体に二次被熱を受けている。SP120からの出土である。

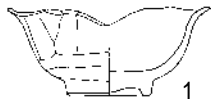
#### 遺構外出土遺物

5・6・7は青磁碗でB-類である。5は外面に印刻が見られる。8は青磁碗であり、内面には印花文が見られる。9は器種不明である。内面は露胎し、器型は碗に比し角張っている。10・11は盤である。12は盤類の足部と思われる。13は青磁である。器種は不明である。見込みに印刻が施されている。14・15は白磁D群の碗である。口縁端部が角張るものである。16は白磁D群の八角小坏である。17は白磁である。口縁端部が尖り外反する。18は古瀬戸折縁小皿であると思われる。19は古瀬戸平碗である。高台脇に段を有し、後期のものである。20は古瀬戸卸皿である。21は古瀬戸卸目付大皿体部破片と思われる。22は古瀬戸筒型容器底部破片と思われる。23は越前の甕体部破片である。外面に押印が見られる。焼成は良好である。24・25は越前甕口縁部である。26は信楽壺体部破片である。27は珠洲すり鉢口縁部である。～期のもと思われる、焼成は還元硬質であるが胎土は粗である。28は珠洲甕底部である。底面に砂を付着させている。29は土師器である。てづくね成型であり、京都系のものである。30・31は土錘である。31の内面には縄(網)に通した際についた使用痕が認められる。32・33は釘である。頭部の形状から、折釘に分類される。34は、舟釘と思われる。

(工藤 忍)

第137次調査区遺構内  
出土遺物

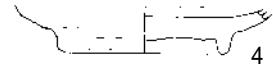
SK18



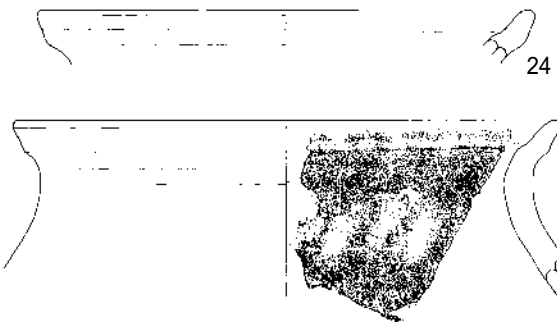
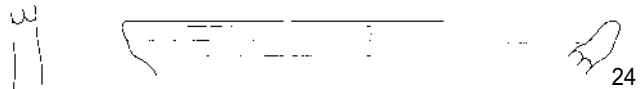
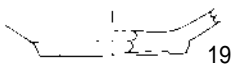
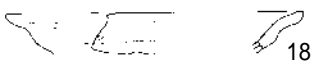
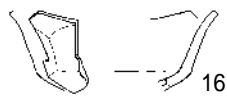
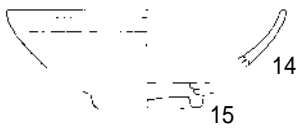
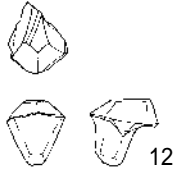
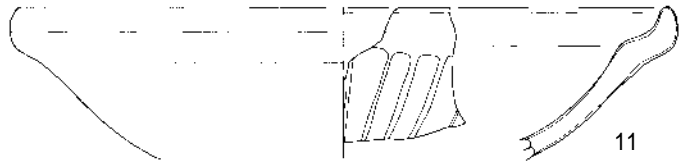
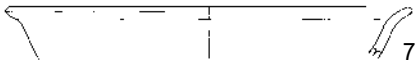
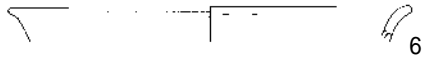
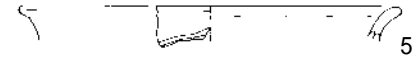
畑跡覆土



SP120

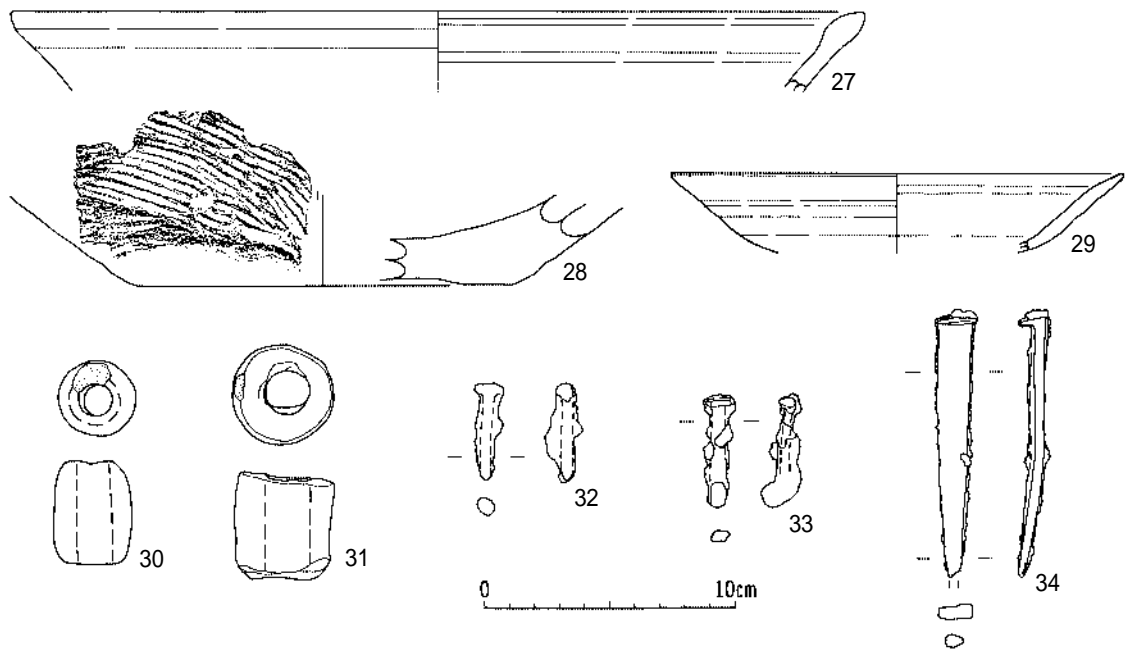


第137次調査区遺構外出土遺物



0 10cm

第 8 図 第137次調査区出土遺物 (1)



第9図 第137次調査区出土遺物(2)

## 2 第138次調査区

湊迎寺の北方、第137次調査区の東側に位置し、畑地として利用されていた箇所である。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約15m×約南北5mの合計約75㎡である。遺構の検出は第1層上面、第2層上面、第3層上面で行った。遺構平面図は、中世遺構と想定されるもののみ抽出し、掲載した。

### (1) 基本層序

第138次調査区の土層は、畑地土壌改良のため、第1層から第3層上層にかけて破壊を受けていた。未破壊部分で確認したところでは、基本土層はほぼ隣接する第137次調査区と同様であると思われた。調査区西部では、しまりがなく乾きやすい第1a層が破壊を免れ残存し、その下層には第137次調査区から延びる畝状遺構が検出された。

### (2) 検出遺構(第6図)

遺構の検出は、第1層上面、第2層上面、第3層上面で行った。内訳は、第137次調査区同様土坑・土坑墓・ピットである。本調査区で検出した中世のものと思われる遺構は、土坑1基、畝状遺構、柱穴72基である。以下、概要を報告する。

#### (a) 掘立柱建物跡

調査区全域でピットが確認されているが、全体に小規模なものが多い。調査区東部に密に分布する傾向がある。本調査区では、図示していないが4棟の掘立柱建物跡が復元できるようなのである。調査面積が少ないため、建物の面的な広がりを把握するまでは至らなかった。

#### (b) 土坑

本調査区における土坑は、1基のみである。確認面からの深さは約20cmほどの小規模なものである。出土遺物の出土は見られなかった。

#### (c) 畝状遺構

本調査区の西側、Y = 16.0以西で確認された。Y = 16.0以东では土壌改良工事により破壊されていた。平面では溝部分(凹部)は3条確認された。溝と溝の間隔は約90~100cmで深さは約5~10cmである。畝の軸は約E 5°~7° Nである。本遺構の直上には、しまりがなく乾きやすい第1a層が堆積する。第2層の上面が変化し、本遺構を構成する。これらの様相は第137次調査区検出畝条遺構と類似しており、同一のものと考えることができる。

### (3) 出土遺物(第10図)

#### 遺構内出土遺物

35は青磁碗D-類腰部破片である。36は珠洲すり鉢口縁部破片であり、口縁形態から前期のものと思われる。焼成は酸化軟質であり、胎土は密である。35・36はSP08覆土からの出土である。37は

青磁碗D- 類の破片である。見込み部分に印花文がみられる。SP64覆土からの出土である。

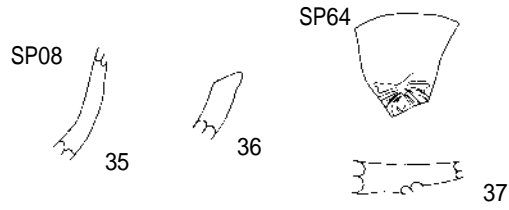
#### 遺構外出土遺物

38は象嵌青磁である。内外面とも施釉しており、外面には白色・黒色の象嵌を施す。瓶胴部であると思われる。39は青磁の香炉口縁部破片と思われる。40・41は青磁であり龍泉窯系碗D- 類の口縁部破片である。42は青磁龍泉窯系皿口縁部破片である。43は青磁であり龍泉窯系碗D- 類の破片である。44・45・46は青磁盤類であり、44・45は口縁部から体部にかけてのものであり、46は底部破片である。置付部分の釉は掻き取られていない。47は白磁D群八角小坏である。48は古瀬戸平碗の口縁部から体部にかけての破片である。内外面とも施釉するが体部外面下半は露胎する。後 期のもと考えられる。49は古瀬戸平碗である。50は珠洲の甕胴部破片である。体部外面の叩き目から、 期から 期のもと思われる。焼成は還元硬質であり、胎土は密である。51は珠洲すり鉢の口縁部から体部にかけての破片である。52は珠洲すり鉢底部破片である。内面は8条一組の卸目を施す。焼成は還元硬質であり、胎土は密である。内面の卸目の状態から、 期のもと思われる。53から57は土師器である。いずれもてづくね整形である。胎土は精良であり、口縁部内面に黒色物質が付着するものも散見せられる(53・54) 58は古銭である。聖宋元寶である。初鑄年は1101年である。

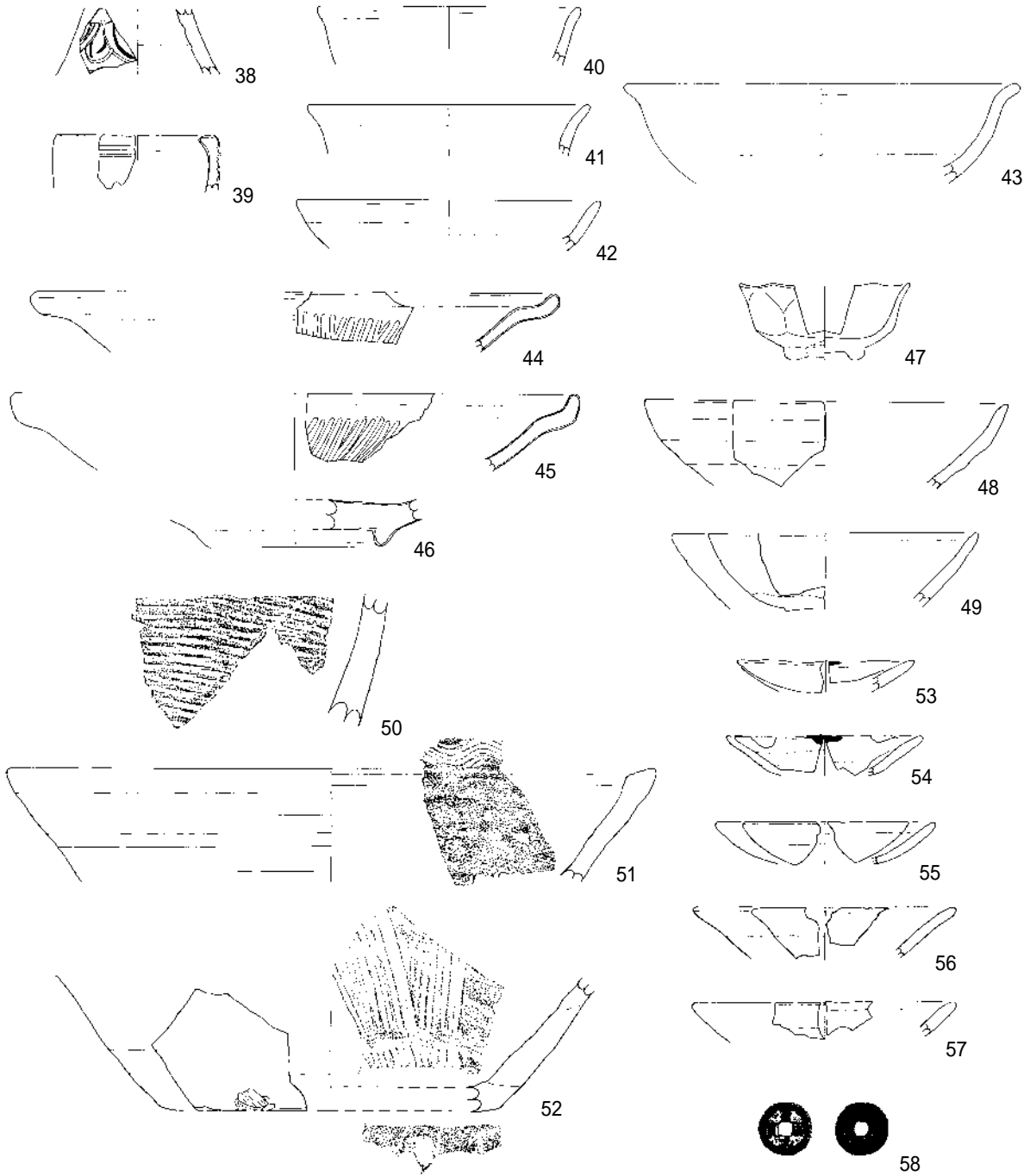
(工藤 忍)



遺構内出土遺物



遺構外出土遺物



0 10cm

第10図 第138次調査区出土遺物

### 3 第139次調査区

湊迎寺の南に位置する。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約7m×南北約4mの合計約28m<sup>2</sup>である。遺構の検出は第1層上面、第2層上面、第3層上面で行っており、それぞれ第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面とし報告する。第1層はその層相から、飛砂堆積層に類似する。

#### (1) 基本土層

第139次調査区では、基本土層は土質によって第1層から第5層に区分している。上から順に第1層：灰黄褐色砂質土主体層（表土・耕作土）、第2層：にぶい黄褐色砂質土主体層、第3層：褐色砂質土主体層、第4層：にぶい黄褐色砂質土主体層、第5層：黒褐色砂質土主体層、第6層：黒褐色砂質土主体層である。これら1～5層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

#### (2) 検出遺構（第11図）

##### 第1遺構面検出遺構

###### (a) 区画遺構

調査区のほぼ中央部に、1条検出された。軸はN 5° Wを示し、覆土は単一である。

###### (b) 土坑

2基検出された。SK01・SK02とも平面形は楕円形であり、確認面からの深さはSK01は約30cm、SK02は約10cmを測る。SK01・SK02とも覆土に鉄滓および粘土塊、炭化物を含む。鍛冶関連の遺構と思われる。

###### (c) 柱穴

調査区全域でピットが確認されているが、全体に小規模なものが多い。掘立柱建物は確認できなかった。

##### 第2遺構面検出遺構

###### (a) 畝状遺構

本調査区の全面で確認された。溝部分（凹部）は4条確認された。溝と溝の間隔は約1.2～1.3mで深さは約5～10cmである。畝の軸は約E 1° Nである。本遺構の直上には、しまりがなく乾きやすい第1層が堆積する。第2層の上面が変化し、本遺構を構成する。これらの様相は第137次調査区検出畝条遺構と類似している。

###### (b) 柱穴

2基検出した。掘立柱建物跡は確認できなかった。

##### 第3遺構面検出遺構

###### (a) 区画遺構

本調査区の北西隅で確認した。軸はN 25° Eを示し、調査区外に延びるものである。

(b) 柱 穴

2基検出した。小規模なものであり、掘立柱建物跡は確認できなかった。

(3) 出土遺物(第12図)

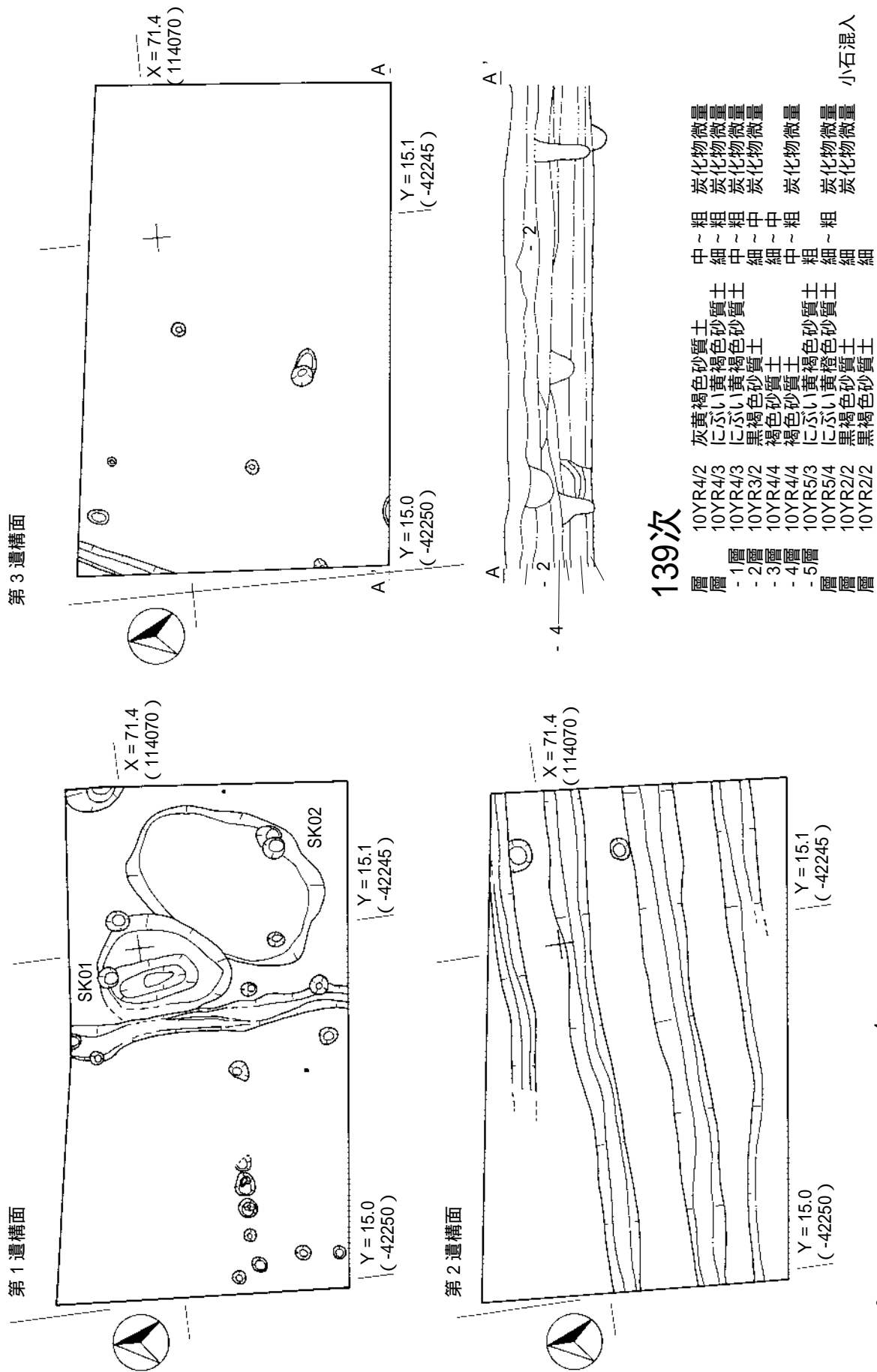
遺構内出土遺物

59は外面に白色釉を持つ白磁D群の皿である。底部露胎部全体にわたり煤状物質が付着している。60は不明金属製品である。厚さ5mm程の板状を呈し、途中で折れ曲がる。61は釘である頭部の形態から、折釘か頭巻釘と思われる。59・60・61はSK01覆土からの出土である。62は青磁龍泉窯系碗D-類の口縁部破片である。63は青磁龍泉窯系碗D-1類胎部破片である。64は古瀬戸天目茶碗体部破片である。内外面とも天目釉を施す。65はすり鉢体部から底部にかけての破片である。内面は卸目を施し、底面は静止糸切りの痕跡がみられる。焼成は還元硬質であり、胎土は密である。期のものである。66はすり鉢体部破片である。内面に7本1単位の卸目を施す。焼成は還元硬質であり、胎土は密である。67はすり鉢口縁部破片である。口唇部に櫛目波状文を施す。焼成は還元硬質であり、胎土は粗である。期のものである。68・69は釘と思われる。頭部の形態から、折釘と思われる。62・63・64・65・66・67・68・69はSK02覆土からの出土である。70は古瀬戸平碗体部破片と思われる。釉が体部途中で切れており、後期か後期と思われる。SD01の覆土からの出土である。

遺構外出土遺物

71は白磁碗口縁部から体部の破片である。口縁端部が外反するものである。白磁碗A群と思われる。72は白磁皿の口縁部から底部にかけての破片である。内外面とも白色釉を施すが高台畳付から高台内にかけては露胎する、白磁D群のものである。73は古瀬戸縁釉小皿口縁部から体部破片である。釉を内外面とも体部半ばまで施すものである。後期のものであると思われる。74は珠洲すり鉢口縁部から体部にかけての破片である。口唇部に櫛目波状文を施し、内面には卸目が施される。期のものである。

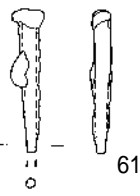
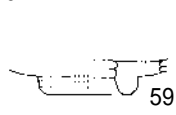
(工藤 忍)



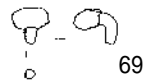
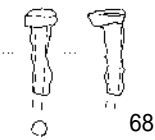
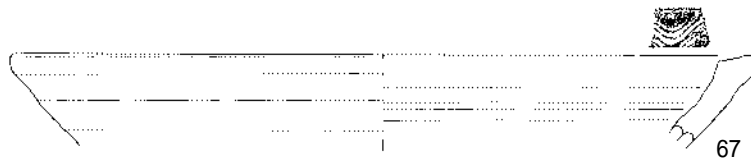
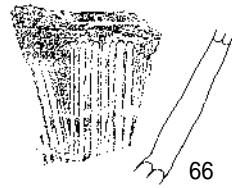
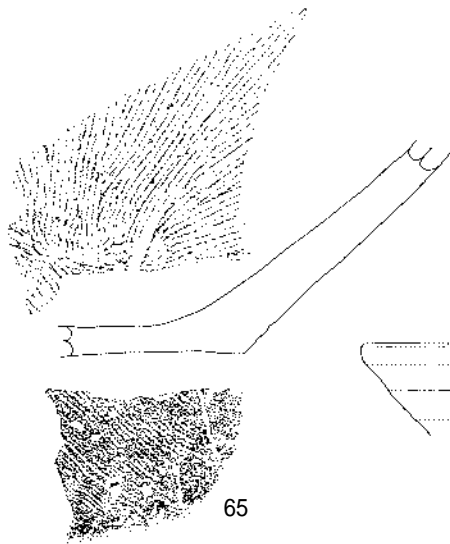
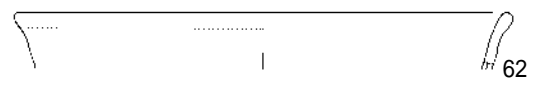
第11図 第139次調査区 遺構平面図

遺構内出土遺物

SK01



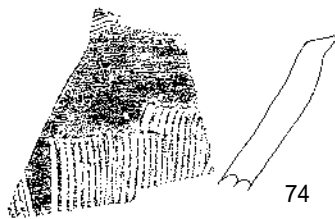
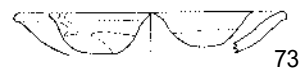
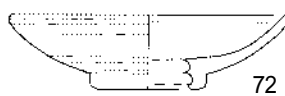
SK02



SD01



遺構外出土遺物



第12図 第139次調査区出土遺物

#### 4 第140次調査区

湊迎寺に付属する墓地の北側に位置する。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約3m×南北約2mの合計約6㎡である。遺構の検出は第1層で行っている。遺構は確認にとどめ、完掘はしていない。

##### (1) 基本層序 (第13図)

第140次調査区では、基本土層は土質によって第1層から第4層に区分している。上から順に第1層：黒褐色砂質土主体層（表土・耕作土）、第2層：暗褐色砂質土主体層、第3層：黒褐色砂質土主体層、第4層：黒色土主体層、第5層：灰黄褐色砂である。

##### (2) 検出遺構 (第13図)

###### (a) 土坑

2基検出した。そのうちの1基は、土層の堆積状況から、近世遺構の可能性が高いと思われる。平面形が楕円形を呈するものは、覆土が第1層に類似することから、中世の遺構の可能性が高いと思われる。

###### (b) ピット

15基検出した。掘立柱建物の存在も考えられるが、調査面積が少ないため、詳細は不明である。

##### (3) 出土遺物 (第15図)

75は古瀬戸縁釉小皿口縁部である。体部下半が露胎するものである。後期のものと思われる。

(工藤 忍)

#### 5 第141次調査区

湊迎寺に付属する墓地の北側に位置する。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の、土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約4m×南北約2mの合計約8㎡である。遺構の検出は第1層で行っている。遺構は確認にとどめ、完掘はしていない。

##### (1) 基本土層

第141次調査区の基本土層は、隣接する第140次調査区と類似する。上から順に第1層：黒褐色砂質土主体層（表土・耕作土）、第2層：暗褐色砂質土主体層、第3層：黒褐色砂質土主体層、第4層：黒色土主体層、第5層：灰黄褐色砂である。

##### (2) 検出遺構 (第13図)

###### (a) 土坑

2基検出した。土層の堆積状況から、近世遺構の可能性が高いと思われる。平面形が方形を呈するものは、覆土に骨片を含むことや、その平面形態から、土坑墓の可能性が高いと思われる。

###### (b) 区画遺構

1条検出した。第1層を掘り込み構築されている。

###### (c) ピット

7基検出した。全体に小規模なものが多い。

##### (3) 出土遺物 (第15図)

76は青磁龍泉窯系碗D-類体部破片である。内面見込み付近に不明確な印花文を施すものである。77は古瀬戸縁釉小皿口縁部から体部破片である。体部下半が露胎するものである。後期のものと思われる。

(工藤 忍)

## 6 第142次調査区

願龍寺の東側に位置する。国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の寺域範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約11m×南北約2mの合計約22㎡である。遺構の検出は第層で行なった。遺構は完掘していない。

本稿では、第層検出遺構について報告する。

### (1) 基本層序(第13図)

第142次調査区では、基本土層は第層から第層に区分している。上から順に第層：黒褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第層：黒褐色砂質土主体層、第層：黒褐色砂質土主体層、第層：黒褐色砂質土主体層、第層：灰黄褐色砂である。

### (2) 検出遺構(第13図)

#### (a) 土坑

14基検出した。遺物の出土状況及び土層堆積状況から、近世遺構の可能性が高いと思われる。覆土に骨片および炭化物を含む、近世土坑墓も検出されている。

#### (b) ピット

44基検出した。掘立柱建物の存在も考えられるが、調査面積が少ないため、詳細は不明である。

### (3) 出土遺物

図示可能な中世遺物は出土しなかった。(工藤 忍)

## 7 第143次調査区

願龍寺の東側、第142次調査区の東側に位置する。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の寺域の範囲を想定し、設定した。国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の寺域範囲と思われる。本調査区の調査面積は、東西約8m×南北約2mの合計約16㎡である。遺構の検出は第層で行なった。第層で遺構分布が希薄なところは第層でも検出を行った。遺構は完掘していない。

本稿では、第層・第層検出遺構について報告する。

### (1) 基本層序(第13図)

第143次調査区では、基本土層は土質によって第層から第層に区分している。上から順に第層：黒褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第層：黒褐色砂質土主体層、第層：黒色砂質土主体層、第層：黒褐色土主体層、第層：灰黄褐色砂層である。これら～層に大分した基本土層は、さらに算用数字を用いて細分している。

### (2) 検出遺構(第13図)

#### (a) 土坑

5基検出した。遺物の出土状況及び土層堆積状況から、近世遺構の可能性が高いと思われる。覆土に骨片および炭化物を含む、近世土坑墓も検出されている。

#### (b) 区画遺構

1基検出した。調査区を南北に貫くように検出され、幅は約80cmを測る。調査区壁面で観察される土層堆積状況から、近世遺構の可能性が高い。

### (3) 出土遺物(第15図)

78は青磁龍泉窯系碗D-類の口縁部破片である。79は珠洲壺甕類体部破片である。外面は叩き目

を施す。焼成は還元硬質であり、胎土は密である。80は不明鉄製品である。形状がかすがい状を呈する。81は煙管雁首部分である。火皿の体部に小穴が穿孔されている。雁首上部に使用痕は認められない。

(工藤 忍)

## 8 第144次調査区

湊迎寺の北側に位置する。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の、土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約2m×南北約17mの合計約34㎡である。遺構の検出は第1層上面で行っている。遺構は確認にとどめ、完掘はしていない。

### (1) 基本層序(第14図)

第144次調査区では、基本土層は土質によって第1層から第4層に区分している。上から順に第1層：黒褐色・暗褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第2層：黒褐色砂質土褐色主体層、第3層：黒褐色砂質土主体層、第4層：黒色土主体層、第5層：灰黄褐色砂層(地山無遺物層)である。これら5層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。本稿では、第1a層検出遺構について報告する。

### (2) 検出遺構(第14図)

#### (a) 土坑

8基確認した。平面形が不整円形を呈するものと、隅丸長方形を呈するものに大別される。後者の遺構確認面からは、炭化物塊と骨片が出土していることから、土坑墓の可能性が高い。

#### (b) 畝状遺構

本調査区の南部、X=73.4～X=73.5で確認している。平面では溝部分(凹部)は6条確認された。溝と溝の間隔は約60～80cmである。畝の軸は約E 10°～18° Nである。本遺構の直上には、しまりがなく乾きやすい第1a層が部分的に自然堆積している。これらの様相は第137次調査区で検出した畝条遺構と類似している。

#### (c) ピット

42基検出した。小規模なものがほとんどであるが、一部掘り方の直径が約40cm程のものもみられる。

### (3) 出土遺物(第15図)

#### 遺構外出土遺物

82は古瀬戸縁釉小皿の口縁部から体部破片である。内外面とも体部下半は露胎である。後期のものと思われる。83は器種不明古瀬戸である。内外面とも露胎であるが、上部に釉の痕跡がみられる。底部には窯着防止の粘土塊がみられる。底面には回転糸切り痕がみられる。

84・85は越前甕体部破片である。85の内面には成型時の指頭圧痕がみられる。胎土は密である。86は珠洲甕体部破片である。焼成は還元軟質であり、胎土は密である。前期から後期のものと思われる。87は珠洲壺T種肩部破片である。焼成は還元硬質であり、胎土は密である。88は珠洲壺K種である。外面はよく研磨されており、2つの刻印(印花文)を施すものである。89は珠洲すり鉢体部破片である。内面には10状1組の卸目を施す。焼成は還元硬質であり胎土は密である。前期のものと思われる。

(工藤 忍)



## 9 第146次調査区

本調査区は、湊迎寺の北方、第137次調査区の北側に位置する。調査前は荒地であった。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約3m×南北約2mの合計約6m<sup>2</sup>である。遺構の検出は第b層と第a層の2面で行った。第b層で検出した遺構の精査の後、第a層で遺構の確認を行った。a層検出遺構は確認にとどめており、完掘はしていない。

本稿では、第a層検出遺構について報告する。

### (1) 基本層序(第14図)

第146次調査区では、基本土層は土質によって第層から第層に区分している。上から順に第層：黒褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第層：暗褐色砂質土主体層、第層：黒褐色砂質土主体層、第層：黒色土主体層、第層：灰黄褐色砂層(地山無遺物層)である。これら～層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

### (2) 検出遺構(第14図)

#### (a) 土坑

平面と調査区北・西壁にて3基検出した。いずれも基本土層第層を掘り込むものである。

#### (b) 区画遺構

3条検出した。いずれも基本土層第層を掘り込むものである。SD02の平面形は直線的なものではない。SD03とSD04はSD02よりもその規模が大きく、遺構新旧関係は、SD03とSD04よりもSD02が新しい。

#### (c) ピット

平面と調査区北壁にて計4基検出した。いずれも基本土層第層を掘り込むものである。

### (3) 出土遺物(第15図)

#### 遺構外出土遺物

90は瓦質土器の風炉である。酸化硬質であり胎土は密である。風炉種である。91は珠洲すり鉢口縁部破片である。口唇部に櫛目波状文を施す。体部内面に卸目がわずかに残存する。期のものである。

(工藤 忍)

## 10 第147次調査区

本調査区は、湊迎寺の北方、第146次調査区の北側に位置する。調査前は荒地であった。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の、土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約4m×南北約2mの合計約8m<sup>2</sup>である。遺構の検出は第b層と第層の2面で行った。第b層で検出した遺構の精査の後、第層で遺構の確認を行った。第層検出遺構は確認にとどめており、完掘はしていない。

本稿では、第層検出遺構について報告する。

### (1) 基本層序(第14図)

第147次調査区では、基本土層は土質によって第層から第層に区分している。上から順に第層：暗褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第層：暗褐色砂質土主体層、第層：黒褐色砂質土主体層、第層：黒色土主体層、第層：灰黄褐色砂層(地山無遺物層)である。これら～層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

## (2) 検出遺構 (第14図)

### (a) 区画遺構

1条検出した。基本土層第 層を掘り込むものである。調査区南壁で遺構断面を観察すると、その掘り込みは浅く、底面形状は鍋底型を呈する。

### (b) ピット

3基検出した。

## (3) 出土遺物 (第15図)

92は珠洲壺T種肩部破片である。外面に綾杉の叩き目を施すもので、焼成は還元硬質であり、胎土は密である。 期のものと考えられる。 (工藤 忍)

## 11 第148次調査区

本調査区は、湊迎寺の北方、第147次調査区の北側に位置する。調査前は畑地であった。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約2m×南北約4mの合計約8㎡である。表土下約2mまで掘り下げたが、プライマリーな土層が確認できなかったため、調査を断念した。出土遺物は主に近現代の陶磁器を主体とするが、中・近世遺物も相当量出土する。

## (1) 出土遺物 (第16図)

93は瓦質土器の奈良火鉢口縁部破片である。浅鉢 に分類され、焼成は酸化軟質である。胎土は密であり、外面に凸帯が2条巡らされ、その間に菱形文のスタンプを押捺する。 (工藤 忍)

## 12 第149次調査区

本調査区は、湊迎寺の北方、第144次調査区の西側に位置する。調査前は畑地であった。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約4m×南北約2mの合計約8㎡である。遺構の検出は第 a層と第 a層上面の2面で行った。第 b層で検出した遺構の精査の後、第 a層上面で遺構の確認を行った。第 a層上面検出遺構は、確認にとどめており、完掘はしていない。

本稿では、第 a層上面検出遺構について報告する。

## (1) 基本層序 (第14図)

第149次調査区では、基本土層は土質によって第 層から第 層に区分している。上から順に第 層：暗褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第 層：暗褐色砂質土主体層、第 層：黒褐色砂質土主体層、第 層：黒色土主体層、第 層：暗褐色砂質土(地山無遺物層)である。これら ~ 層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

## (2) 検出遺構 (第14図)

### (a) 土坑

1基検出した。基本土層第 層を掘り込むものであり、第 a層上面検出遺構中で最も新しい遺構である。

### (b) 区画遺構

1条検出した。 b層を掘り込み構築される。上面は a層に被覆されている。調査区南壁の土層断面から判断される掘り込みは約20cmであり、柵列の痕跡は認められなかった。

(b) 畝状遺構

溝部分（凹部）は3条確認された。溝と溝の間隔は約50～60cmである。畝の軸は約E 12°～14° Nである。

(c) ピット

平面にて7基検出した。1基からは柱痕を確認している。畝状遺構より新しいものと古いものがあり、また、区画遺構より新しいものもみられる。

(3) 出土遺物（第16図）

94は青磁の香炉口縁部と思われる。95は古瀬戸折縁小皿口縁部から体部にかけての破片である。口唇部が尖り、立ち上がるものである。内外面に施釉するが、外面体部下半は露胎している。

（工藤 忍）

13 第150次調査区

本調査区は、湊迎寺の北方、第149次調査区の北側に位置する。調査前は畑地であった。本調査区は、国立歴史民俗博物館が提示した想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定した。本調査区の調査面積は、東西約2m×南北約2mの合計約4m<sup>2</sup>である。遺構の検出は、第a層上面で行った。検出遺構は、確認にとどめており、完掘はしていない。

(1) 基本層序（第14図）

第137次調査区では、基本土層は土質によって第層から第層に区分している。上から順に第層：黒褐色・暗褐色砂質土主体層（表土・耕作土）、第層：欠如、第層：暗褐色砂質土主体層、第層：黒色土主体層、第層：灰黄褐色砂（地山無遺物層）である。これら～層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

(2) 検出遺構（第14図）

(a) 土坑

調査区南壁土層断面にて1基検出した。第a層を掘り込むものである。

(b) 区画遺構

1条検出した。a層を掘り込み構築される。調査区南壁の土層断面から判断される掘り込みは30cm以上である。遺構新旧関係は、畝状遺構より古い。

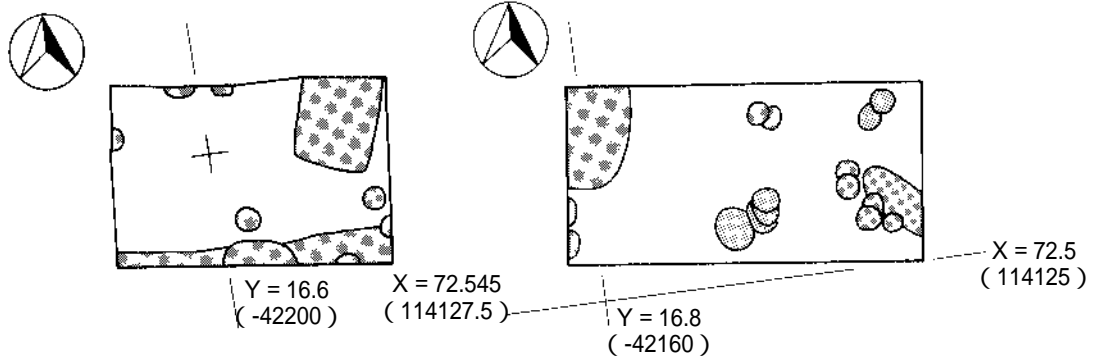
(c) 畝状遺構

溝部分（凹部）は2条確認された。溝と溝の間隔は約50～70cmである。軸は約E 23°～28° Nである。調査面積が少ないため、本遺構群を畝状遺構と認定するのは困難であるが、近接する第144次調査区や第149次調査区でも同様の遺構が検出されていることから、本稿では畝状遺構とした。遺構新旧関係は、区画遺構より古い。

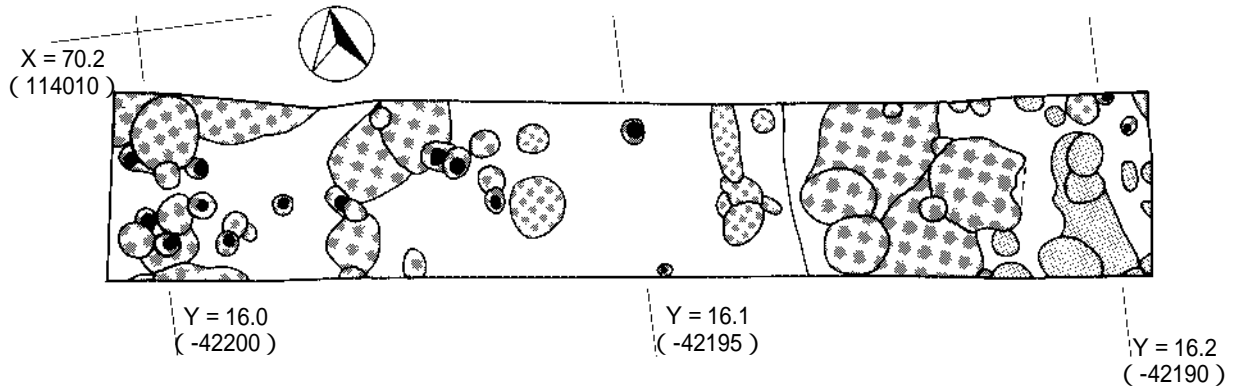
(c) ピット

4基検出した。2基からは柱痕を確認している。畝状遺構より新しいものと古いものがみられる。

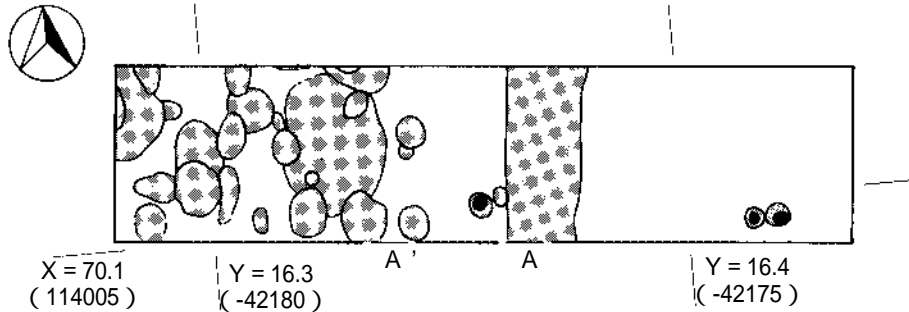
第140次調査区



第142次調査区 (層上面)



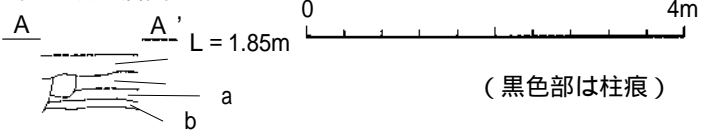
第143次調査区 (層上面・一部 層上面)



第142次土層模式図



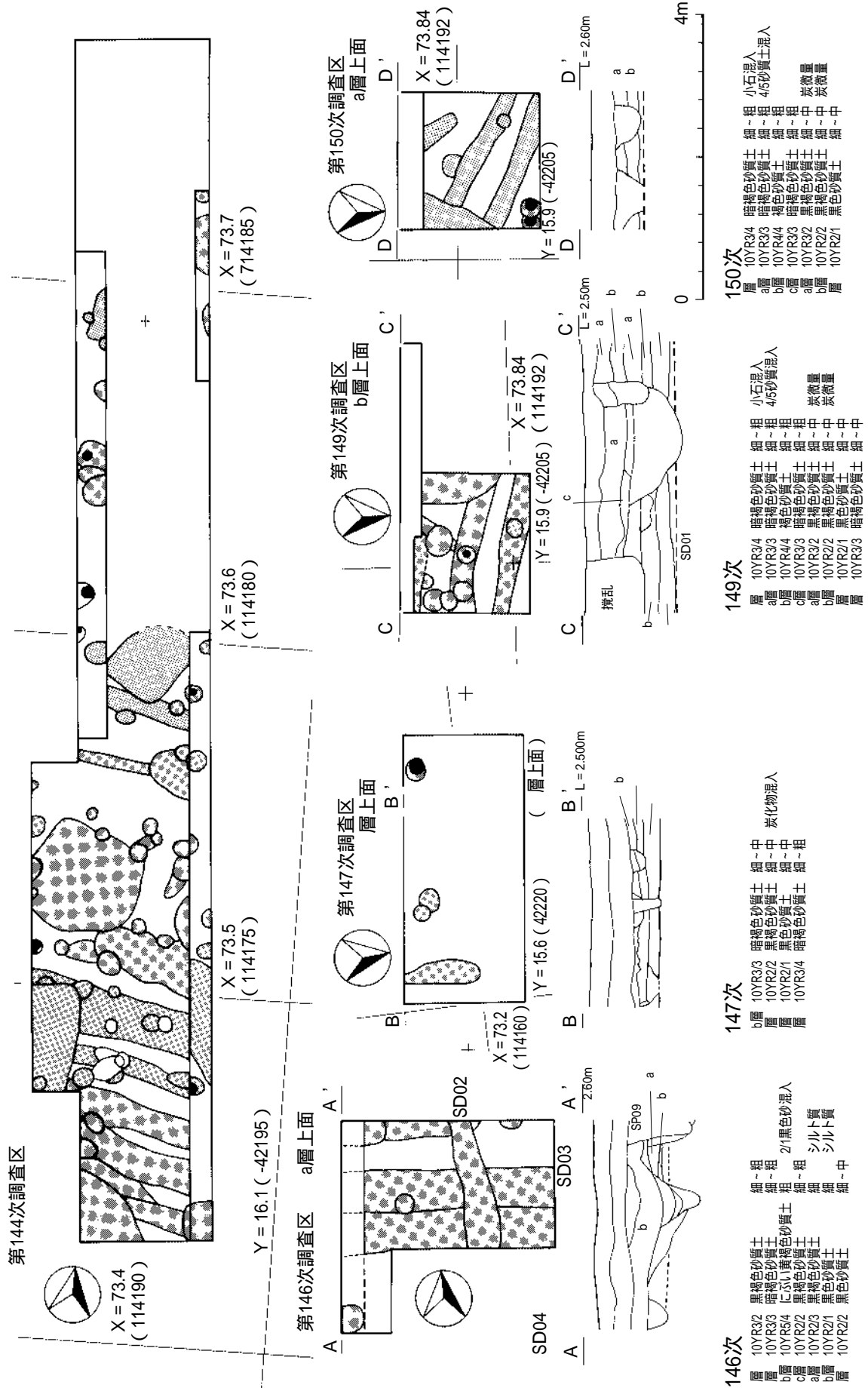
第143次土層図



143次

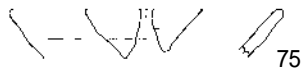
層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細～中
層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細～中
a層	10YR1.7/1	黒色砂質土	細～粗
b層	10YR2/1	黒色砂質土	細～粗
層	10YR2/3	黒褐色砂質土	細～中

第13図 第140・141・142・143次調査区平面図



第14図 第144・146・147・149・150次調査区平面図

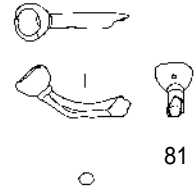
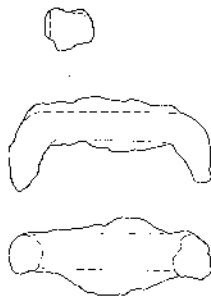
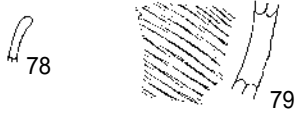
第140次調査区出土遺物



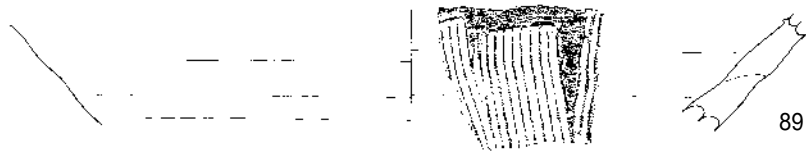
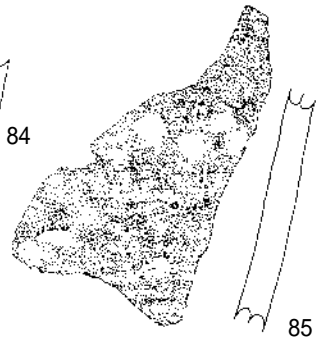
第141次調査区出土遺物



第143次調査区出土遺物



第144次調査区出土遺物



第146次調査区出土遺物



第147次調査区出土遺物

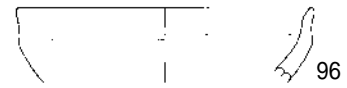
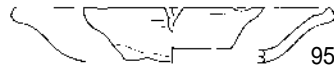


第15図 第140・141・143・144・146・147次調査区出土遺物

第148次調査区出土遺物



第149次調査区出土遺物



0 10cm

第16図 第148・149次調査区出土遺物

# 第 章 ま と め

今年度の調査は、これまで国立歴史民俗博物館が復元想定した町屋の南限の確認と町屋地区における宗教施設の確認を主目的とした。

町屋の南限を確認するため、十三湊遺跡の町屋地区の南端部、バイパス道路に面した場所を調査の対象地とした。この第136次調査地点は、調査の結果、明確な屋敷地や建物跡は確認できなかったが、墓の可能性の高い土坑が検出された。このことから、今回の調査区は墓域として利用されていたと思われる。

また、調査区の東側では最大幅約2m、深さ約80cmの南北方向に向かって、やや蛇行して延びる溝跡を確認した。

出土遺物は、青磁や白磁などの貿易陶磁器のほか、国内で生産された古瀬戸や珠洲などが出土した。また、遺物の年代から、土坑墓の埋没年代は十三湊遺跡の最盛期である15世紀前半であると考えられ、町屋の形成時期と同時期と思われる。

宗教施設の確認のため、国立歴史民俗博物館により提示された十三湊遺跡復元図内の想定寺院を調査の対象とし、その根拠となった湊迎寺や願龍寺の周辺部を調査地として選定した。

調査の結果、中世遺構面と近世遺構面を検出した。第137・138・142・143次調査区では近世面で多数の柱穴を確認し、土坑墓や火葬墓を検出した。これらの墓は、近世の湊迎寺及び願龍寺の寺域を想定する上で重要である。

中世面では、湊迎寺の周辺の調査区では畝状遺構（畑跡）が確認され、E-1°7°-Nの軸線を持つものと、E-12°23°-Nの軸線を持つものに大別される。畝状遺構は第137・138・139・144次調査区で黄褐色の砂に被覆されていた。第144次調査区では、畝状遺構を破壊して中世の土坑墓が構築されている状況が確認された。

掘立柱建物は、第137・138次調査区で数棟存在する可能性が認められた。柱穴の規模は矮小であり、また礎石を伴う柱穴も少ない。

願龍寺東側の調査区では、近世遺構の数が多く、下層の中世遺構を確認した面積はわずかであった。確認された中世遺構は柱穴のみであり、土坑や区画遺構を確認することはできなかった。

出土遺物は、陶磁器や鉄製品、銅銭が出土したが、遺物包含層を含めて遺物点数が少ない傾向があり、また、懸仏や鰐口などの遺物も今回の調査で出土しなかった。ただし、てづくねの土師器皿（かわらけ）が第138次調査区の基本土層第 層の上に堆積する遺物包含層から炭化物を伴いまとまって出土しており、何らかの祭祀行為が第138次調査区周辺で行われた可能性がある。今後、遺物の器種組成比の比較等、遺物面での検討が必要であろう。

これらのことから、湊迎寺や願龍寺周辺での宗教施設の存在については、今後の調査事例の集積を待ち、判断するべきものと思われた。

（工藤 忍）



## 引用・参考文献

- |                        |       |                                                                           |
|------------------------|-------|---------------------------------------------------------------------------|
| 青森県教育委員会               | 2000年 | 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第286集                                                   |
| 青森県教育委員会               | 2000年 | 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第286集                                                   |
| 青森県教育委員会               | 2000年 | 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第286集                                                   |
| 青森県教育委員会               | 2000年 | 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第286集                                                   |
| 青森県教育委員会               | 2000年 | 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第286集                                                   |
| 青森県教育委員会               | 2000年 | 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第286集                                                   |
| 青森県教育委員会               | 2001年 | 『長溜池遺跡』青森県埋蔵文化財報告書第311集                                                   |
| 平賀町教育委員会               | 2000年 | 『大光寺新城跡遺跡(第7・9・11次発掘調査)』<br>平賀町埋蔵文化財報告書第27集                               |
| (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |       |                                                                           |
|                        | 1994年 | 『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第228集                                            |
| 森田 勉                   | 1982年 | 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』 2<br>日本貿易陶磁研究会                                 |
| 佐々木 達夫                 | 1985年 | 「北日本出土の朝鮮陶磁器とその背景」『日本海文化』第12号<br>金沢大学日本海文化研究室                             |
| 藤澤 良祐                  | 1991年 | 「瀬戸古窯址群 -古瀬戸後期様式の編年-」『研究紀要』                                               |
| 大橋 康二                  | 1994年 | 『古伊万里の文様』理工学社                                                             |
| 吉岡 康暢                  | 1994年 | 『中世須恵器の研究』吉川弘文館                                                           |
| 榊原 滋高                  | 1998年 | 「青森県における在地土器(かわらけ)の編年について<br>-12世紀後半から18世紀まで-」<br>『東北地方の在地土器・陶磁器』東北中世考古学会 |
| 珠洲市立珠洲焼資料館             | 1989年 | 『珠洲の名陶』                                                                   |
| 西田宏子・大橋康二他             | 1988年 | 『古伊万里』別冊太陽 63 平凡社                                                         |
| 中世土器研究会編               | 1995年 | 『概説 中世の土器・陶磁器』                                                            |
| 兵庫埋蔵銭調査会               | 1996年 | 『日本出土銭総覧』1996年版                                                           |
| 東北中世考古学会               | 1997年 | 『東北地方の在地土器・陶磁器』                                                           |

# 写真図版



調査前遠景



完掘(南から)



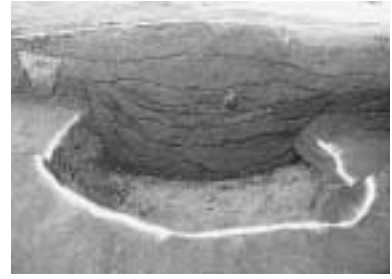
SD02セクション(北から)



SD02完掘(南から)



SK01遺物出土状況(東から)



SK03セクション(北から)



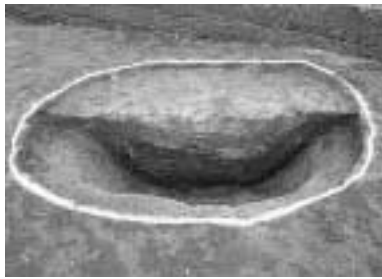
完掘(東から)



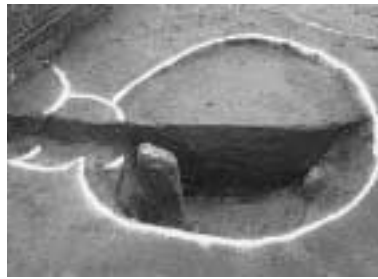
SD05完掘(北から)



SD05セクション(北から)



SK15セクション(東から)



SP42・SP43・SK16セクション(西から)



SK21・SK20セクション(南から)



SK22セクション・遺物出土状況(東から)



SK23セクション(南から)



SD07～SD10検出(北から)

写真1 第136次調査区



第137次調査区調査前風景（東から）



第138次調査区調査前風景（南から）



第137次調査区畝状遺構検出状況（西から）



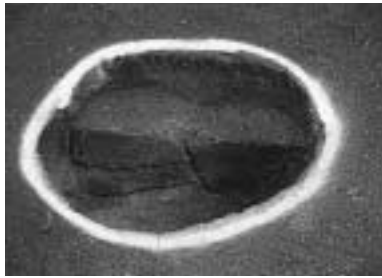
第137次調査区北壁土層断面（東から）



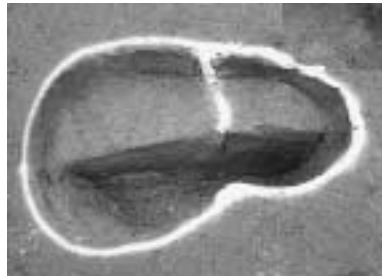
第137次調査区調査風景（東から）



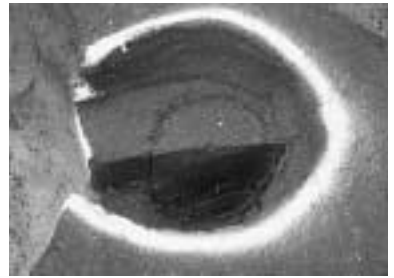
第137次調査区遺物検出状況（西から）



第138次調査区SP92セクション（西から）



第138次調査区SP115・SP116セクション（西から）



第138次調査区SP110セクション（南東から）



第138次調査区完掘状況（西から）



第138次調査区完掘状況（東から）



第138次調査区完掘状況（南から）



第139次調査区南壁土層断面図（西から）



第139次調査区完掘状況（西から）



第139次調査区畝状遺構検出状況（西から）

写真2 第137次・第138次・第139次調査区検出遺構



第140次調査区遺構検出状況（西から）



第141次調査区遺構検出状況（西から）



第142次調査区遺構検出状況（西から）



第143次調査区遺構検出状況（西から）



第144次調査区遺構検出状況（南から）



第144次調査区遺構検出状況（北から）



第144次調査区土抗墓検出状況（西から）



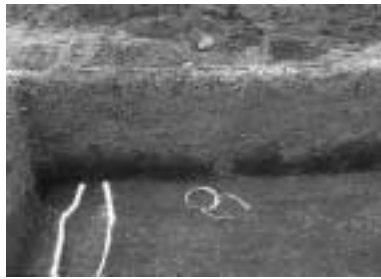
第146次調査区遺構検出状況（東から）



第146次調査区西壁土層断面（東から）



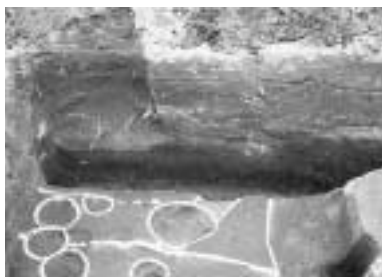
第147次調査区遺構検出状況（東から）



第147次調査区南壁土層断面（北から）



第149次調査区遺構検出状況（西から）



第149次調査区南壁土層断面（北から）



第150次調査区遺構検出状況（南から）



第150次調査区南壁土層断面（北から）

写真3 第140次・第141次・第142次・第143次・第144次・第146次・第147次・第149次・第150次調査区検出遺構

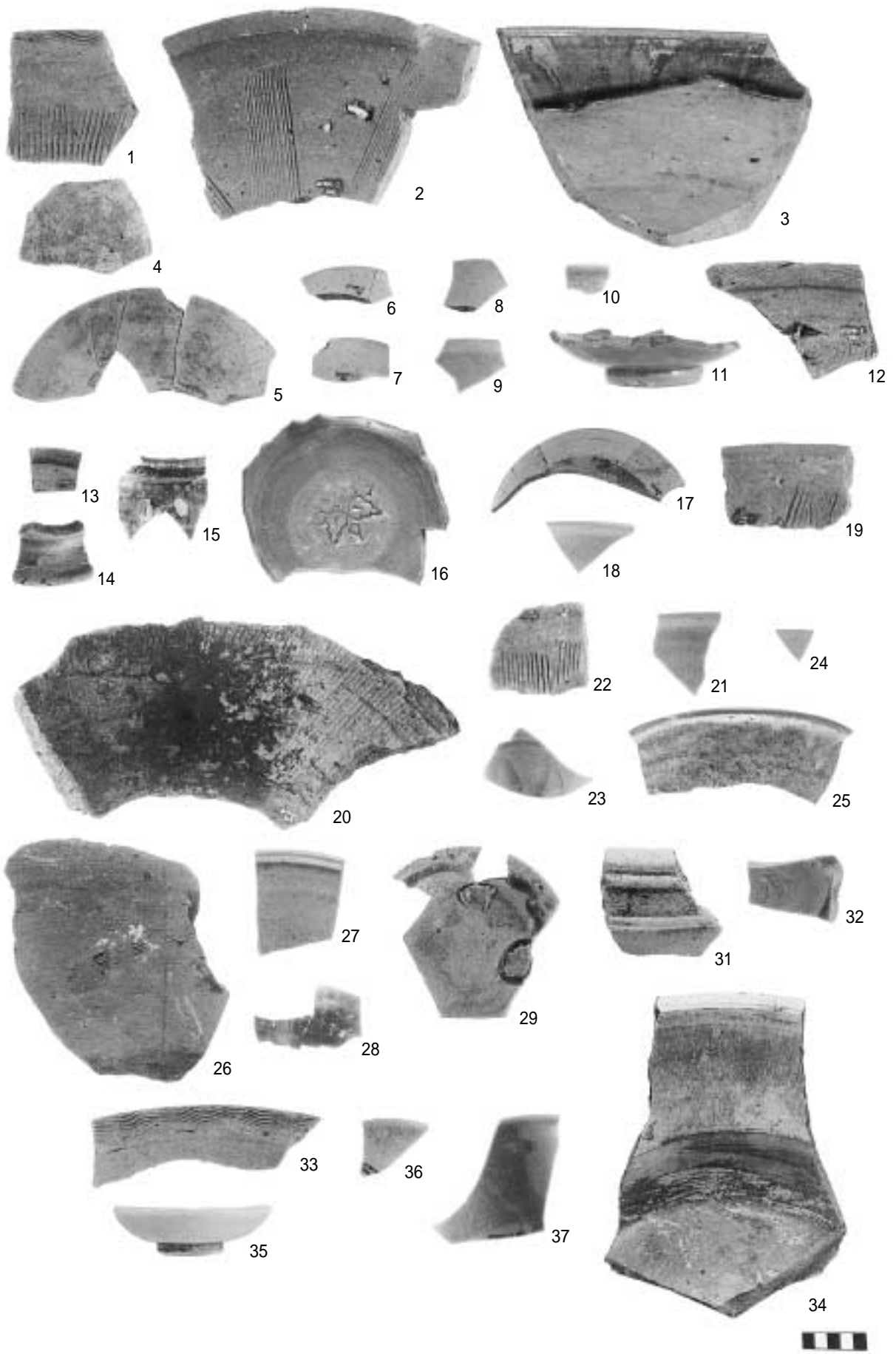


写真4 第136次調査区(1)

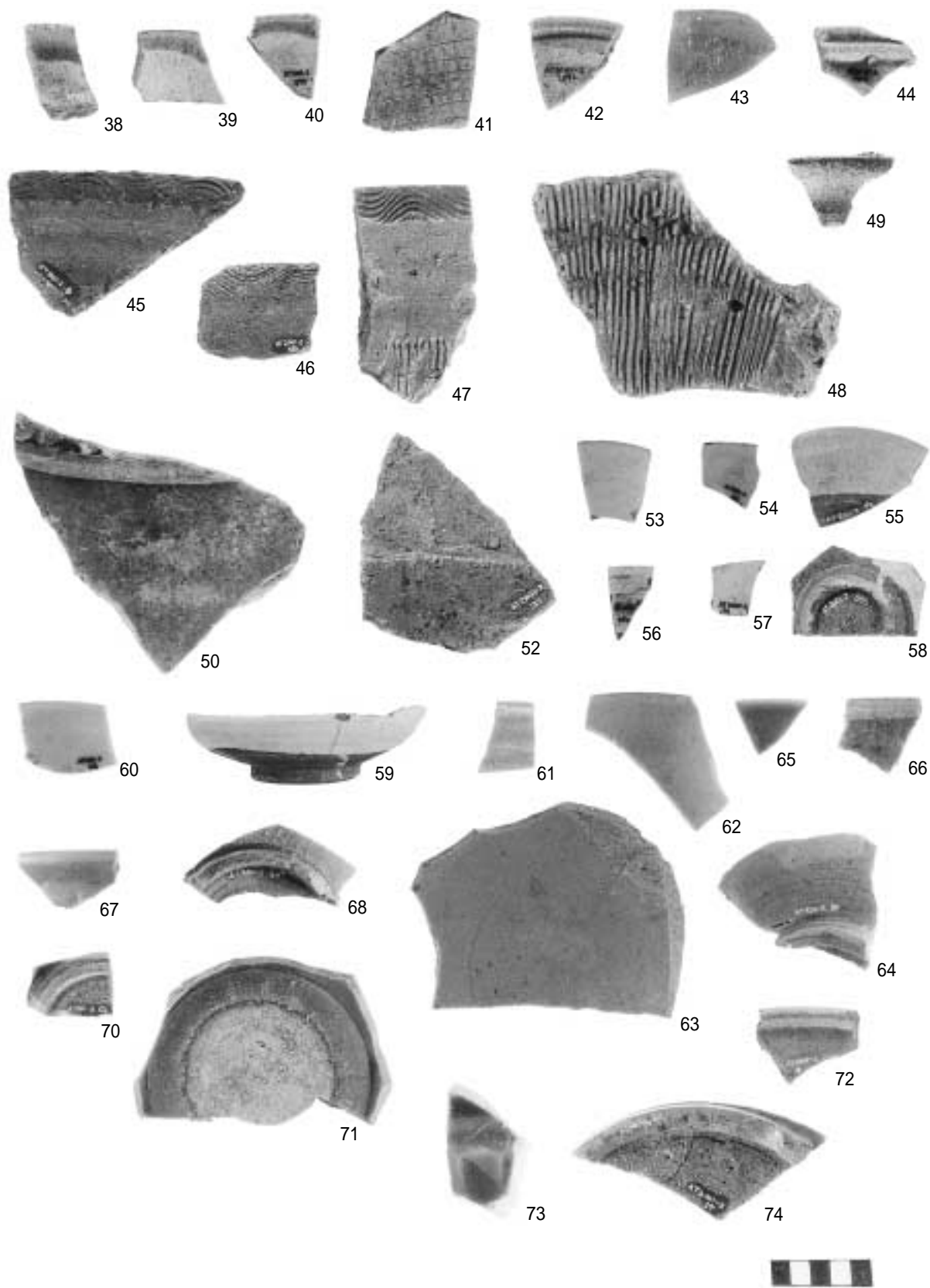
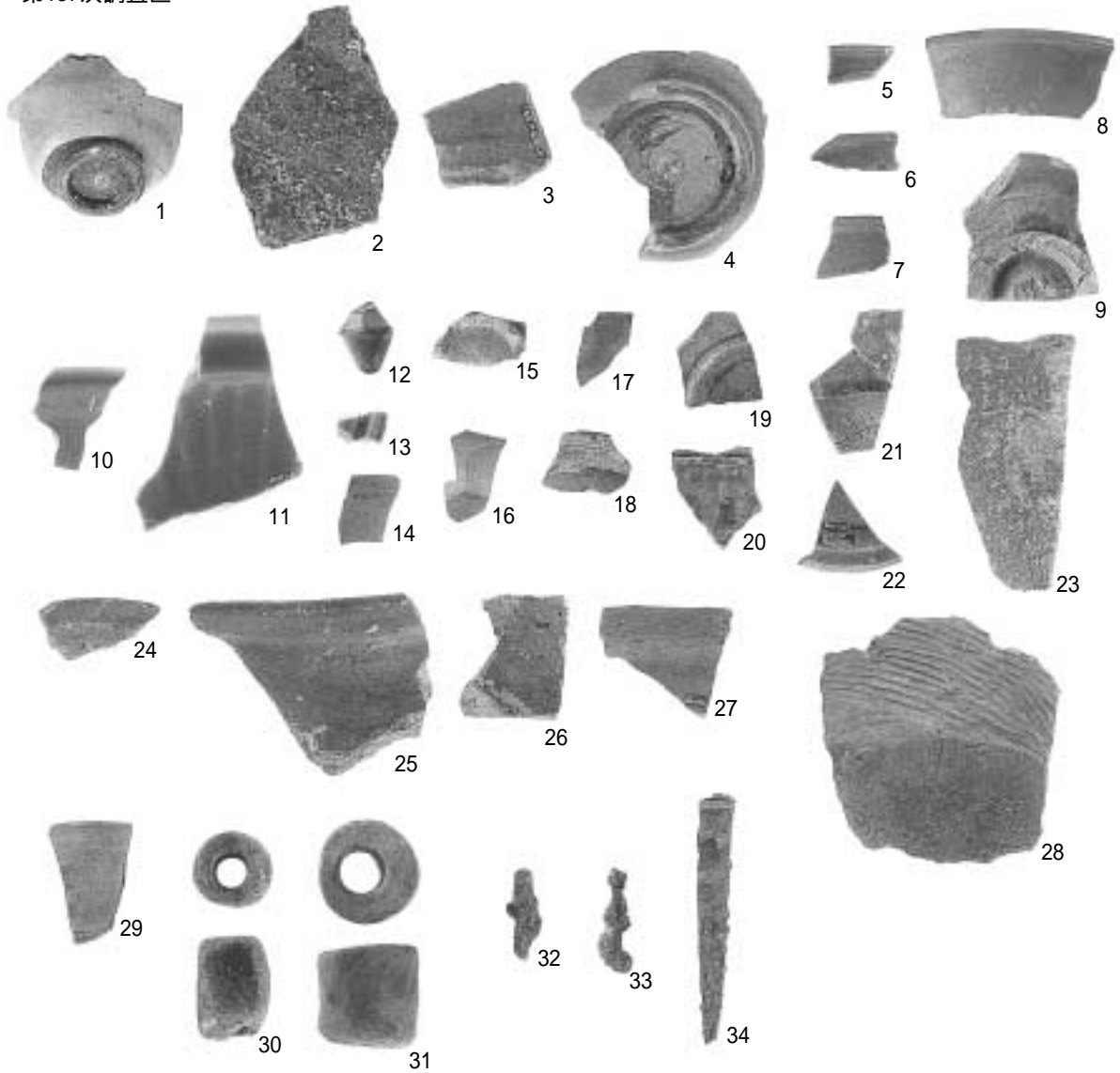


写真5 第136次調査区(2)

第137次調査区



第138次調査区

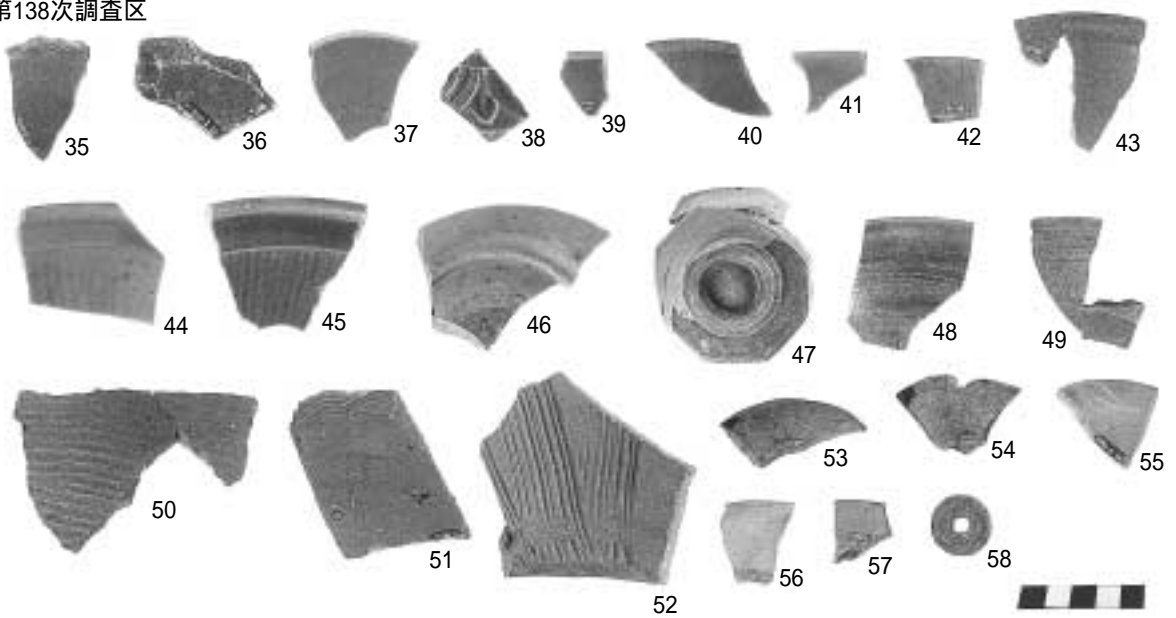
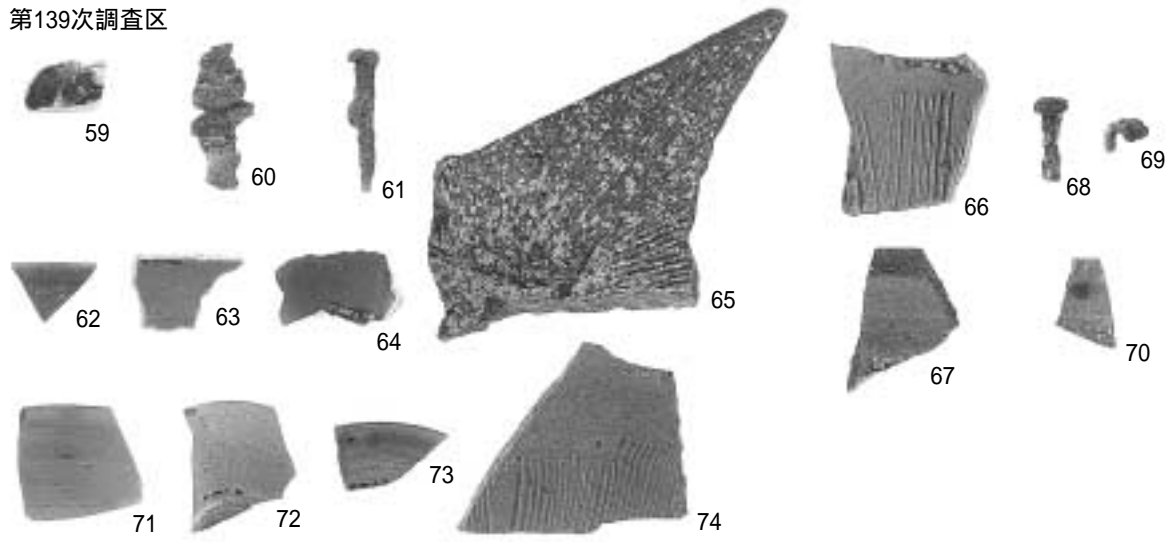


写真6 第137・138次調査区出土遺物



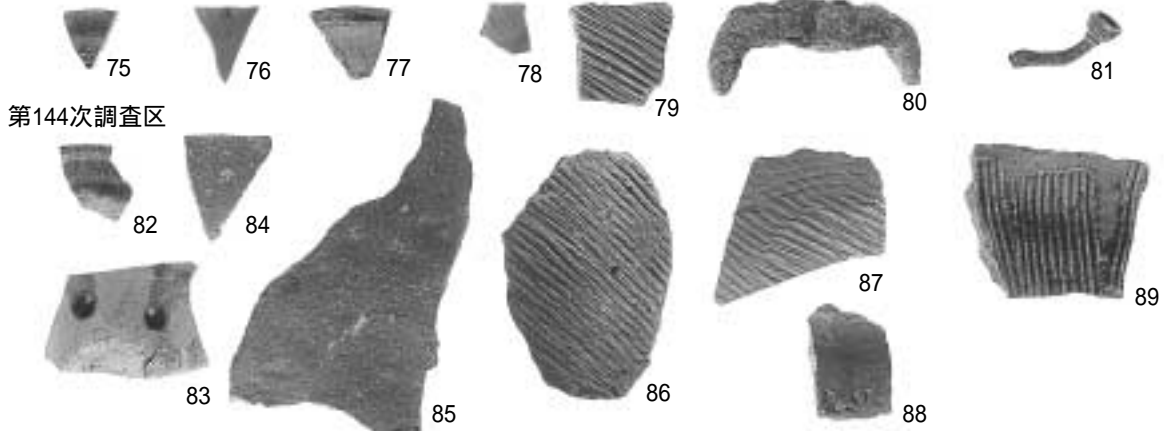
第139次調査区



第140次調査区

第141次調査区

第143次調査区

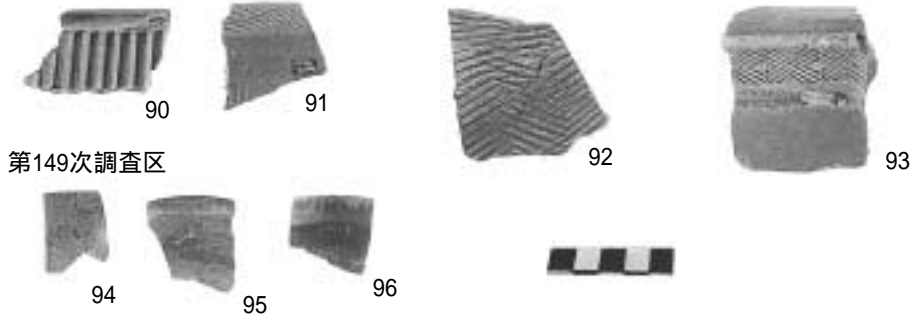


第144次調査区

第146次調査区

第147次調査区

第148次調査区



第149次調査区

写真7 第139・140・141・143・144・146・147・148・149次調査区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	とさみなといせきな
書名	十三湊遺跡
副書名	第136次～144次、第146次～150次発掘調査概報
巻字	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第329集
編著者名	青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財班
編集機関	青森県教育庁文化財保護課
所在地	〒030-0801 青森県青森市新町二丁目3-1
発行年月日	平成14年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とさみなといせき 十三湊遺跡	あおもりけんきたつがるぐん しうらむらおおあざじゅうさん 青森県北津軽郡市浦村大字十三	02385	38022			20010604 ～ 20010731  20011127 ～ 20011205	794m <sup>2</sup>	遺跡の概要把握のための学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
十三湊遺跡	集落跡	中世	ピット 土坑 溝跡 井戸 掘立柱建物跡 畝状遺構 不明遺構	土師器 珠洲陶器 古瀬戸 瓦質土器 青磁 白磁 瓷器系陶器 鉄製品 銅製品 石製品 木製品 土製品	・第136次調査区では土坑墓と溝跡が確認された。 ・宗教施設推定地区では畝状遺構と土坑墓が切り合って確認された。
		近世	ピット 土坑 土坑墓		・土坑墓が確認された。

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第329集

## 十三 湊遺跡

発行日 平成14年3月28日

発行 青森県教育委員会

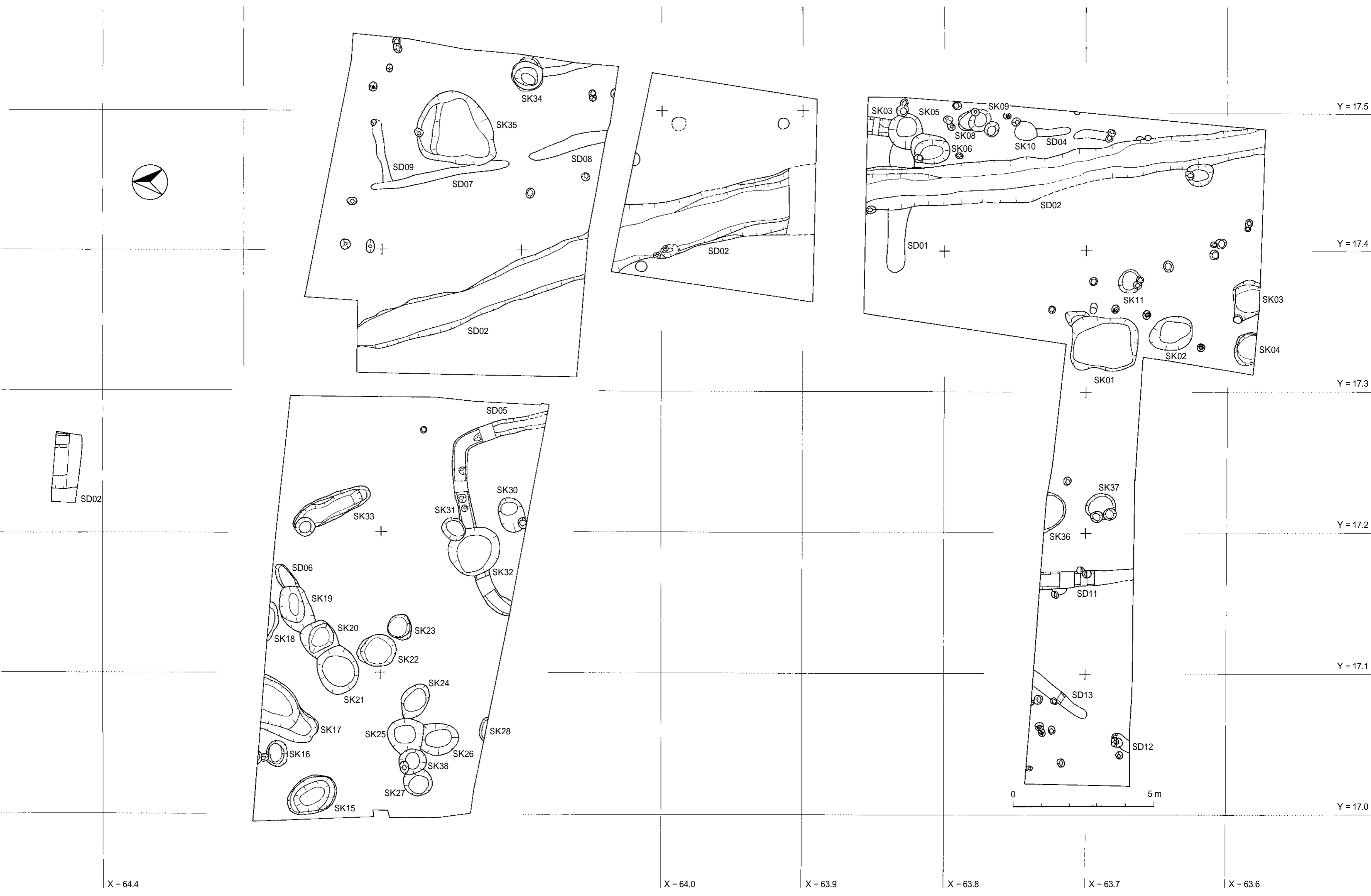
編集 青森県教育庁文化財保護課  
〒030-8540 青森市新町二丁目3番1号  
TEL 017-734-9921 FAX 017-734-8280

印刷所 東北印刷工業株式会社  
〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12  
TEL 017-742-2221 FAX 017-765-1115

---

# 十三湊遺跡

付図 第136次調査区遺構配置図



付図 第136次調査区遺構配置図 (S=1/100)

